現代の日展作家たち ― 日本の美

2021

NITTEN Artists Today: The Beauty of Japan

奥田小由女「命を守る」2020年

114 since 1907

はじめに

途絶えることなく、美を世に送り出す

公益社団法人日展は、明治四十年の文部省美術展覧会（文展）から数えて今年一一四年を迎えます。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五部門からなる作家の団体で、毎年、全国から一万点を越すご応募をいただき、入選者と会員などを合わせて約三千点の新作を国立新美術館の会場に展示いたしております。

新型コロナウイルスが長きにわたり猛威を振るっておりますが、今年も秋の日展を、みなで力を合わせ開催させていただく運びとなりました。会場には絶対にコロナウイルスは入れないという覚悟で、しっかりとお客様に安全な所にお越しいただけるよう体制づくりを進めております。

今年の私の出品作は、長引くコロナの終息を祈るということをテーマに制作を続けております。こうした時代にあって、芸術や美術というものが皆様の心に潤いをもたらすことができますようにと願っております。

様々な芸術活動のなかでも私たちは個人個人で制作をいたします。年に一度、秋の日展の発表の場だけはみなで力を合わせて行うわけです。気持ちがコロナに侵されて萎れていくことは作家生命にも関わります。体も精神状態も健康でみなで支えあって守り抜いていきたいと思っております。

長い人類の歴史をみれば、疫病や災害など、不遇な時代を繰り返してきたわけで今回が初めてということではないのでしょうが、ここからどう復活していくかが一番大事だと思います。そこで途絶えてしまうのではなく、何よりも持続して作品を発表し続けることが重要と思っております。医療従事者の方々の日々に感謝をしつつ、私たちはやはり美を世に送り出すという使命をきちんと果たしていくことを第一に考えております。作家の情熱が展覧会を創り出し、若い特選作家や受賞作家、審査員も新たに生まれていきます。常に休まず努力している作家を世に送り出すことを続けたいと思っております。

そして情熱の結晶である作品を、広く皆様にご高覧いただき、皆様の心に「やすらぎ」をお届けできますよう努力してまいります。今後も皆様のご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

公益社団法人日展　理事長
奥田　小由女

もくじ

日展の顧問・理事・監事・会員紹介 …… 4

インタビュー

日本画 福田 千恵 「一志不退」一枚の絵を残したい …… 16

洋画 湯山 俊久 風景画と人物画を両輪に。作家精神を後世に伝える …… 20

彫刻 神戸 峰男 創意工夫。最初から最後まで一人で完結する …… 24

工芸美術 追悼 武腰 敏昭 ぐい呑みから環境造形まで …… 28

書 高木 聖雨 生涯現役という気持ちで良い作品を残す …… 32

日本画 米田 実 自らの精神性を日本画特有のデザイン性や装飾性を通じて表現 …… 36

洋画 福井 欧夏 風景イメージを投影し、感じる写実をめざす …… 40

彫刻 秋田 美鈴 偶然生まれる良い形を拾って造形する …… 44

工芸美術 村田 好謙 作品作りは自分を引き出すこと。伝統技法の上に新たなものを …… 48

書 近藤 浩乎 空間を動かせるかなの魅力を伝える …… 52

日展開催概要と会期中のイベント …… 56

日展の顧問・理事・監事紹介

（2021年8月20日現在）

日本画　副理事長　事務局長

土屋 禮一（つちや れいいち）

1946年、岐阜県生まれ。加藤東一に師事。1967年、武蔵野美術大学実技専修科日本画卒業。同年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「水たまり」により特選・白寿賞受賞。1976年、第8回日展「暮れて行く」により特選受賞。1985年、第17回日展「隠岐」により日展会員賞受賞。2005年、第37回日展「椿樹」により文部科学大臣賞受賞。2007年、第38回日展出品作「軍鶏」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長事務局長、日本芸術院会員、金沢美術工芸大学名誉教授。

日本画　理事

福田 千惠（ふくだ せんけい）

1946年、東京都生まれ。佐藤太清に師事。1969年、武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業。同年、改組第1回日展初入選。1981年、第13回日展「紫陽花とテレサ」により特選受賞。1984年、第16回日展「単衣の女」により特選受賞。1996年、第28回日展「刀匠」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「ながい夜」により文部大臣賞受賞。2006年、第37回日展出品作「ピアニスト」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。

日本画　理事

山﨑 隆夫（やまざき たかお）

1940年、新潟県生まれ。下保昭に師事。1967年、京都教育大学特修美術日本画専攻科卒業。1965年、第8回日展初入選。1972年、第4回日展「森」により特選受賞。1973年、第5回日展「トマト」により無鑑査・特選受賞。1992年、第24回日展「海游」により日展会員賞受賞。2008年、第40回日展「沼宴」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「海煌」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。

日本画　理事

村居 正之（むらい まさゆき）

1947年、京都府生まれ。池田遙邨に師事。1968年、画塾・青塔社へ入会。1971年、第3回日展初入選。1984年、第7回日展「赤い陸橋」により特選受賞。1990年、第22回日展「サンマルタン運河」により特選受賞。2018年、改組 新 第5回日展「暮れゆく時」により文部科学大臣賞受賞。2020年、改組 新 第3回日展出品作「日照」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、大阪芸術大学教授。紺綬褒章受章。

洋画　副理事長

佐藤 哲（さとう てつ）

1944年、大分県生まれ。江藤哲に師事。1966年、大分大学学芸学部美術科卒業。1975年、第7回日展初入選。1982年、第14回日展「紫陽花の頃」により特選受賞。1993年、第25回日展「黒衣」により特選受賞。2009年、第41回日展「ひととき」により文部科学大臣賞受賞。2013年、第44回日展出品作「夏の終りに」により日本芸院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、東光会理事長。

洋画　理事

湯山 俊久（ゆやま としひさ）

1955年、静岡県生まれ。坪内正、伊藤清永、中山忠彦に師事。1980年、多摩美術大学油画科卒業。1983年、第15回日展初入選。1990年、第22回日展「悠想」により特選受賞。1998年、第30回日展「想春」により特選受賞。2004年、第36回日展「爽秋」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「L'allure（ラ リュール）」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第3回日展出品作「l'Aube（夜明け）」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。

洋画　理事

小灘 一紀（こなだ いっき）

1944年、鳥取県生まれ。芝田米三、大島士一に師事。1967年、金沢美術工芸大学卒業。1973年、第5回日展初入選。1992年、第24回日展「窓辺」により特選受賞。1995年、第27回日展「横たわる」により特選受賞。2002年、第34回日展「めざめ」により日展会員賞受賞。2017年、改組 新 第4回日展「伊須気余理比売」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、日洋会理事長。

洋画　理事

斎藤 秀夫（さいとう ひでお）

1943年、福島県生まれ。伊藤清永に師事。1966年、中央大学卒業。1978年、第10回日展初入選。1991年、第23回日展「午後のひととき」により特選受賞。1993年、第25回日展「ショールの婦人」により特選受賞。2019年、改組 新 第6回日展「清新」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事。

日本画　理事

渡辺 信喜（わたなべ のぶよし）

1941年、京都府生まれ。山口華楊に師事。1964年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）日本画科卒業。同年、第7回日展初入選。1971年、第3回日展「林檎」により特選受賞。1984年、第16回日展「林檎」により特選受賞。2015年、改組 新 第2回日展「夏草」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、京都精華大学名誉教授。

洋画　顧問

中山 忠彦（なかやま ただひこ）

1935年、福岡県生まれ。伊藤清永に師事。1954年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「椅子に倚る」により特選受賞。1981年、第13回日展「縞衣」により特選受賞。1990年、第22回日展「青衣」により日展会員賞受賞。1996年、第28回日展「華粧」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「黒扇」により日本芸術院賞受賞。2001年、日展事務局長。2009年、日展理事長。2019年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、白日会会長。

洋画　顧問

寺坂 公雄（てらさか ただお）

1933年、広島県生まれ。1956年、愛媛大学教育学部美術科卒業。1954年、第10回日展初入選。1962年、第5回日展「カニのある静物」により特選受賞。1986年、第18回日展「レリーフのある棚」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展「デルフォイへの道」により文部科学大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「アクロポリスへの道」により日本芸術院賞受賞。2009年、日展事務局長。2013年、日展理事長。2020年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、光風会理事長、山梨大学名誉教授。

洋画　顧問

藤森 兼明（ふじもり かねあき）

1935年、富山県生まれ。高光一也に師事。1958年、金沢美術工芸大学油絵科卒業。1956年、第12回日展初入選。1980年、第12回日展「画室にて」により特選受賞。1984年、第16回日展「僧院の午後」により特選受賞。2001年、第33回日展「アドレーションパンタナサ」により日展会員賞受賞。2004年、第36回日展「アドレーション・デミトリオス」により内閣総理大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「アドレーションサンビターレ」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員、光風会理事長。

日展の顧問・理事・監事紹介

工芸美術　顧問

中井 貞次（なかい ていじ）

1932年、京都府生まれ。1954年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）工芸科卒業。1956年、同大学専攻科修了。1953年、第9回日展初入選。1969年、改組第1回日展「集積」により特選・北斗賞受賞。1977年、第9回日展「間の実在」により特選受賞。1990年、第22回日展「巨木積雪」により文部大臣賞受賞。1993年、第23回日展出品作「原生雨林」により日本芸術院賞受賞。2017年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。

工芸美術　顧問

森野 泰明（もりの たいめい）

1934年、京都府生まれ。1958年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）卒業。1960年、同大学専攻科修了。1957年、第13回日展初入選。1960年、第3回日展「青釉花器」により特選・北斗賞受賞。1966年、第9回日展「花器『藍』」により特選・北斗賞受賞。2007年、第38回日展出品作「扁壺『大地』」により日本芸術院賞受賞。2019年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。

工芸美術　顧問

伊藤 裕司（いとう ひろし）

1930年、京都府生まれ。山崎覚太郎に師事。1953年、京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸コース漆芸科卒業。同年、第9回日展初入選。1966年、第9回日展「刻象“大地”その内なるもの」により特選・北斗賞受賞。1968年、第11回日展「燦光」により特選・北斗賞受賞。1983年、第15回日展「収穫」により日展会員賞受賞。2004年、第35回日展出品作「スサノオ聚抄」により日本芸術院賞受賞。2018年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。

工芸美術　理事長

奥田 小由女（おくだ さゆめ）

1936年、大阪府生まれ。1967年、第10回日展初入選。1972年、第4回日展「或るページ」により特選受賞。1974年、第6回日展「風」により特選受賞。1988年、第20回日展「海の詩」により文部大臣賞受賞。1990年、第21回日展出品作「炎心」により日本芸術院賞受賞。2006年、奥田元宋・小由女美術館開館。2008年、文化功労者。2013年、日展事務局長。2014年、日展理事長。2020年、文化勲章受章。現在、日展理事長、日本芸術院会員、現代工芸美術家協会理事長。

彫刻　理事

宮瀬 富之（みやせ とみゆき）

1941年、京都府生まれ。松田尚之に師事。1968年、金沢美術工芸大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1973年、第5回日展「風のよそおい」により特選受賞。1974年、第6回日展「風の中を」により無鑑査・特選受賞。2005年、第37回日展「はんなりと石庭に」により内閣総理大臣賞受賞。2009年、第40回日展出品作「源氏物語絵巻に想う」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大阪成蹊短期大学名誉教授。

彫刻　監事

石黒 光二（いしぐろ こうじ）

1952年、山形県生まれ。高橋剛に師事。1974年、多摩美術大学彫刻科卒業。1976年、第8回日展初入選。1985年、第17回日展「風の調べ」により特選受賞。1988年、第20回日展「風舞」により特選受賞。1998年、第30回日展「幻華」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展「月光」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展監事。

工芸美術　顧問

大樋 年朗（おおひ としろう）

1927年、石川県生まれ。1949年、東京美術学校（現・東京藝術大学）工芸科卒業。1950年、第6回日展初入選。1956年、第12回日展「『風寒し』青釉花器」により北斗賞受賞。1957年、第13回日展「『鶏』緑釉壺」により特選・北斗賞受賞。1961年、第4回日展「釉彩『魚紋』花器」により特選・北斗賞受賞。1982年、第14回日展「『歩いた道』花器」により文部大臣賞受賞。1985年、第16回日展出品作「『峙つ』花三島飾壺」により日本芸術院賞受賞。2004年、文化功労者。2008年、金沢学院大学副学長。2011年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。

工芸美術　顧問

今井 政之（いまい まさゆき）

1930年、大阪府生まれ。楠部彌弌に師事。1957年、広島県立竹原工業学校金属工芸科卒業。1953年、第9回日展初入選。1959年、第2回日展「焼〆『盤』」により特選・北斗賞受賞。1963年、第6回日展「『泥彩』壺」により特選・北斗賞受賞。1998年、「赫窯 雙蟹」により日本芸術院賞受賞。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。2018年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。

彫刻　理事

能島 征二（のうじま せいじ）

1941年、東京都生まれ。小森邦夫に師事。1964年、茨城大学教育学部美術科卒業。1962年、第5回日展初入選。1969年、改組第1回日展「窮」により特選受賞。1971年、第3回日展「省」により特選受賞。1990年、第22回日展「五月の女」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「悠久の時」により文部大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「慈愛ーこもれび」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。

彫刻　理事

山本 眞輔（やまもと しんすけ）

1939年、愛知県生まれ。1963年、東京教育大学（現・筑波大学）教育学専攻科卒業。1962年、第5回日展初入選。1972年、第4回日展「生きがい」により特選受賞。1980年、第12回日展「ひたむき」により特選受賞。1992年、第24回日展「いい日」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「森からの声」により内閣総理大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「生生流転」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、名古屋市立大学名誉教授。

彫刻　副理事長

神戸 峰男（かんべ みねお）

1944年、岐阜県生まれ。清水多嘉示、木下繁に師事。1967年、武蔵野美術大学造形学部卒業。1968年、第11回日展初入選。1976年、第8回日展「裸婦」により特選受賞。1978年、第10回日展「裸婦」により特選受賞。2006年、第38回日展「長風」により文部科学大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「朝」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、日本彫刻会理事長、名古屋芸術大学名誉教授。

彫刻　理事

山田 朝彦（やまだ ともひこ）

1943年、広島県生まれ。1966年、明治大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1987年、第19回日展「雄」により特選受賞。1990年、第22回日展「若人」により特選受賞。2012年、第44回日展「こもれび」により文部科学大臣賞受賞。2016年、改組 新 第2回日展出品作「朝の響き」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。

洋画　監事

町田 博文（まちだ ひろぶみ）

1953年、茨城県生まれ。寺島龍一に師事。1976年、茨城大学卒業。1982年、第14回日展初入選。2000年、第32回日展「雪の朝」により特選受賞。2003年、第35回日展「新雪の麓」により特選受賞。2018年、改組 新 第5回日展「新雪の河畔」により文部科学大臣賞受賞。現在、日展監事。

彫刻　顧問

中村 晋也（なかむら しんや）

1926年、三重県生まれ。東京高等師範学校卒業。1950年、第6回日展初入選。1967年、第10回日展「華の譜」により特選受賞。1968年、第11回日展「想華の詞」により無鑑査・特選受賞。1969年、改組第1回日展「宴の華」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「星のいのり」により日展会員賞受賞。1984年、第16回日展「焦躁の旅路」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「朝の祈り」により日本芸術院賞受賞。1996年、中村晋也美術館を設立。1999年、勲三等旭日中綬章受章。2002年、文化功労者。2007年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、鹿児島大学名誉教授、筑波大学名誉博士。

彫刻　顧問

川崎 普照（かわさき ひろてる）

1931年、東京都生まれ。斎藤素巌、平野敬吉、進藤武松に師事。1961年、第4回日展初入選。1964年、第7回日展「暖流」により特選受賞。1993年、第25回日展「未来への讃歌」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「大地」により日本芸術院賞受賞。2007年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。

彫刻　顧問

蛭田 二郎（ひるた じろう）

1933年、茨城県生まれ。小森邦夫に師事。1958年、茨城大学教育学部卒業。1965年、第8回日展初入選。1966年、第9回日展「ひとり」により特選受賞。1967年、第10回日展「女」により特選受賞。1968年、第11回日展「女'68」により菊華賞受賞。1996年、第28回日展「告知」により文部大臣賞受賞。2002年、第33回日展出品作「告知−2001−」により日本芸術院賞受賞。2016年、北茨城市蛭田二郎彫刻ギャラリー開設。2018年旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、岡山大学名誉教授、倉敷芸術科学大学名誉教授。

日展の顧問・理事・監事紹介

書　理事

新井 光風（あらい こうふう）

1937年、東京都生まれ。西川寧に師事。1966年、第9回日展初入選。1972年、第4回日展「九穀斯豊」により特選受賞。1978年、第10回日展「熱鐵」により特選受賞。1994年、第26回日展「雲龍風虎」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「盛稲梁」により文部大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「明且鮮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。2020年、旭日小綬章受章。現在、日展理事、大東文化大学名誉教授。

書　理事

星 弘道（ほし こうどう）

1944年、栃木県生まれ。浅香鉄心に師事。1967年、立正大学卒業。1975年、第7回日展初入選。1990年、第22回日展「蘇東坡詩」により特選受賞。1992年、第24回日展「曾鞏詩」により特選受賞。2007年、第39回日展「李濂詩」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「小学之一文」により文部科学大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「李頎詩 贈張旭」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。

書　監事

土橋 靖子（つちはし やすこ）

1956年、千葉県生まれ。日比野五鳳、日比野光鳳に師事。1979年、東京学芸大学書道科卒業。1980年、東京学芸大学専攻科（書道）修了。同年、第12回日展初入選。1992年、第24回日展「雪」により特選受賞。1998年、第30回日展「夕されば」により特選受賞。2008年、第40回日展「良寛春秋」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展出品作「墨染」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第4回日展出品作「かつしかの里」により日本芸術院賞受賞。現在、日展監事。

書　顧問

尾崎 邑鵬（おざき ゆうほう）

1924年、京都府生まれ。廣津雲仙、辻本史邑に師事。1954年、第10回日展初入選。1963年、第6回日展「陸游の詩」により特選・苞竹賞受賞。1970年、第2回日展「高青邱詩 送陳少府赴嘉定」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「竹窓」により日展会員賞受賞。1986年、第18回日展「高青邱詩」により文部大臣賞受賞。1993年、第24回日展出品作「杜少陵詩」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化功労者。現在、日展顧問。

書　理事

井茂 圭洞（いしげ けいどう）

1936年、兵庫県生まれ。深山龍洞に師事。1961年、京都学芸大学（現・京都教育大学）美術科書道卒業。同年、第4回日展初入選。1977年、第9回日展「梅」により特選受賞。1979年、第11回日展「富士山」により特選受賞。1993年、第25回日展「無常」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展出品作「清流」により内閣総理大臣賞受賞。2003年、第33回日展出品作「清流」により日本芸術院賞受賞。2018年、文化功労者。現在、日展理事、日本芸術院会員、京都教育大学名誉教授。

書　副理事長

黒田 賢一（くろだ けんいち）

1947年、兵庫県生まれ。西谷卯木に師事。1969年、改組第1回日展初入選。1986年、第18回日展「山里」により特選受賞。1990年、第22回日展「ふじの雪」により特選受賞。2003年、第35回日展「深雪」により日展会員賞受賞。2009年、第41回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「小倉山」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、日本書芸院理事長。

書　理事

髙木 聖雨（たかき せいう）

1949年、岡山県生まれ。青山杉雨、成瀬映山に師事。1973年、大東文化大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1989年、第21回日展「天馬」により特選受賞。1993年、第25回日展「建始」により特選受賞。2006年、第38回日展「協穆」により日展会員賞受賞。2015年、改組 新 第2回日展「駿歩」により文部科学大臣賞受賞。2017年、改組 新 第3回日展出品作「協戮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、謙慎書道会理事長、全国書美術振興会理事長、大東文化大学名誉教授。

工芸美術　理事

春山 文典（はるやま ふみのり）

1945年、長野県生まれ。蓮田修吾郎に師事。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1977年、第9回日展初入選。1979年、第11回日展「四角柱イン・セクション」により特選受賞。1984年、第16回日展「無限標」により特選受賞。2000年、第32回日展「風の門」により文部大臣賞受賞。2004年、横浜美術短期大学（現・横浜美術大学）学長。2016年、改組 新 第2回日展出品作「宙の河」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、横浜美術大学名誉教授。

工芸美術　理事

三田村 有純（みたむら ありすみ）

1949年、東京都生まれ。祖父の三田村自芳、父の三田村秀芳、髙橋節郎、田口善国に師事。1973年、東京学芸大学教育学部美術科（工芸専攻）卒業。同年、第5回日展初入選。1975年、東京藝術大学大学院美術研究科（漆芸専攻）修了。1985年、第17回日展「ピラミス・遙か天空に」により特選受賞。1988年、第20回日展「ピラミス・嵩峻」により特選受賞。2014年、改組 新 第1回日展「炎立つ」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展「月の光 その先に」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第3回日展出品作「月の光 その先に」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、東京藝術大学名誉教授。

工芸美術　理事

吉賀 將夫（よしか はたお）

1943年、山口県生まれ。1969年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1975年、第7回日展初入選。1983年、第15回日展「夜明け」により特選受賞。1985年、第17回日展「曜」により特選受賞。1996年、第28回日展「萩釉広口陶壺『ある光景の印象』」により文部大臣賞受賞。2000年、第31回日展出品作「萩釉広口陶壺『曜'99・海』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、山口大学名誉教授、萩陶芸美術館・吉賀大眉記念館理事長。

書　顧問

日比野 光鳳（ひびの こうほう）

1928年、京都府生まれ。父の日比野五鳳に師事。同志社大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1975年、第7回日展「春」により特選受賞。1978年、第10回日展「春」により特選受賞。1987年、第19回日展「天の海」により日展会員賞受賞。1997年、第29回日展「三日月」により内閣総理大臣賞受賞。1999年、第30回日展出品作「花」により日本芸術院賞受賞。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。

日展会員

（2021年8月20日現在）

日本画
（121 名）

土屋禮一
福田千惠
山﨑隆夫
村居正之
渡辺信喜
安堵蒼樹
青木秀明
朝倉隆文
芦田裕昭
荒木弘訓
伊東正次
池内璋美
池田道夫
石井公男
石田育代
石原　進
市原義之
市丸節子
稲田亜紀子
岩田壮平
鵜飼雅樹
上田勝也
内海　泰
大豊世紀
大西守博
岡江　伸
岡田繁憲
岡村倫行
加藤　晋
加藤　智
鍵谷節子
片山侑胤
亀山祐介
川﨑麻児
川﨑鈴彦
川島睦郎
川嶋　渉
川田恭子
河村源三
木村卓央
木村光宏
菊池治子
岸野圭作
北村恵美子
桑野むつ子
佐々木淳一
佐々木　曜
佐藤朱希
佐藤俊介
坂根克介
坂本幸重
澤野慎平
士農　力
鈴木　彰
田島奈須美
田所　浩
髙田淑子
高増暁子
瀧川眞人
辰巳　寛
手塚恒治
戸田博子
利光洋子
那須勝哉
中出信昭
中村賢次
中村　眞
中村　徹
中村文子
仲島昭廣
仲村良一
成田　環
丹羽貴子
西田幸一郎
西田眞人
野田夕希
能島和明
能島千明
能島浜江
袴田規知代
橋本弘安
橋本正弘
長谷川雅也
長谷川喜久
濱田昇児
林　和緒
日影　圭
東　俊行
平尾秀明
平木孝志
藤井範子
藤島大千
藤島博文
古澤洋子
北斗一守
本多功身
間瀬静江
曲子明良
松浦丈子
松崎十朗
松崎良太
丸山　勉
三谷青子
三輪晃久
三輪敦子
水野　收
南　　聡
森　美樹
森脇正人
諸星美喜
安田敦夫
山下邦雄
山下保子
山田　毅
山本　隆
由里本　出
吉村卓司
吉村年代
米倉正美
米田　実
米谷清和

洋画
（109 名）

中山忠彦
寺坂公雄
藤森兼明
佐藤　哲
湯山俊久
小灘一紀
斎藤秀夫
町田博文
青島紀三雄
浅見文紀
浅見嘉正
天野富美男
井上　武
伊藤晴子
飯泉俊夫
池田清明
池田良則
池山阿有
石田宗之
磯崎俊光
稲葉徹應
内山　孝
遠藤原三
小川尊一
小川満章
大竹正治
大友義博
大渕繁樹
大谷喜男
岡田征彦
岡本　猛
加藤寛美
鍵主恭夫
片岡世喜
金山桂子
木原和敏
菊池元男
北本雅己
桐生照子
久保博孝
工藤和男
熊谷有展
倉林愛二郎
栗原高光
桑原富一
小関修一
小牧　幹
古賀英治
児島新太郎
児玉健二
佐藤祐治
佐藤龍人
阪脇郁子
櫻田久美
清水　優
柴田祐作
杉山吉伸
鈴木順一
鈴木　實
田中里奈
田辺知治
高梨芳実
竹留一夫
竹久秀樹
立花　博
寺久保文宣
土井原崇浩
歳嶋洋一朗
中川澄子
永田英右
楢崎重視
成田禎介
難波　滋
西田伸一
西田陽二
西谷之男
西房浩二
西山松生
錦織重治
長谷川　仂
濵本久雄
日野　功
平野行雄
武藤初雄
福井欧夏
福島隆壽
福田あさ子
星川登美子
前田　潤
前原喜好
松下久信
松田　茂
松野　行
丸山　勉
三沢　忠
三塩清巳
三原捷宏
守長雄喜
守屋順吉
安増千枝子
柳瀬俊泰
山田郁子
吉崎道治
李　暁剛
和田　貢
渡邊　明
渡辺啓輔
渡辺雄彦
渡邊裕公

彫刻
（130 名）

中村晋也
川崎普照
蛭田二郎
能島征二
山本眞輔
神戸峰男
山田朝彦
宮瀬富之
石黒光二
安藤孝洋
阿部鉄太郎

古瀬政弘
伯耆正一
干田　浩
前川正治
前田和伸
前田泰昭
待田和宏
宮崎芳郎
宮田亮平
村田好謙
森田清照
安田佳代
山岸大成
山崎輝子
山元健司
山本　清
横山喜八郎
横山善一
吉水絹代
若山裕昭
渡辺洋子

高岡由美子
高津明美
高名秀人光
高橋貞夫
高光一生
竹森公男
武腰一憲
武腰冬樹
立川善治
谷野吉冬
月岡裕二
寺池静人
得地秀生
友定聖雄
内藤英治
中村武郎
中村三喜雄
永井鐵太郎
永澤永信
永野智彦
並木恒延
南雲　龍
西片　正
西川　實
西本瑛泉
西山邦彦
橋本昇三
林　香君
原　典生
原　益夫
百貫俊夫
藤田　仁

加藤令吉
司辻光男
春日井路子
勝　　孝
兼田文男
叶　道夫
亀井　勝
川原和夫
河合徳夫
河野榮一
木下五郎
木谷陽子
久保満義
沓澤則雄
栗本雅子
桑原紀子
小西啓介
小林祥晃
小林英夫
厚東孝治
佐々木達郎
佐治ヒロシ
佐藤好昭
志観寺範從
杉原外喜子
鈴木治平
角　康二
曽根洋司
藏樂瑞惠
田中照一
田中紀子
田中嘉生

工芸美術
（114名）

大樋年朗
今井政之
中井貞次
森野泰明
伊藤裕司
奥田小由女
春山文典
吉賀將夫
三田村有純
安藤タヅ子
安藤　工
相武常雄
青木宏憧
赤堀郁彦
浅井啓介
浅蔵與成
飴村秀子
有山長佑
井隼慶人
伊藤萌木
石川充宏
磯野清夫
上原利丸
上森四郎
小川泰彦
小田謙二
尾長　保
大塩正義
大樋年雄

堀内秀雄
堀尾秀樹
間島博徳
前芝武史
槙野仁一
松岡高則
松田裕康
松田安生
南川憲生
宮坂慎司
宮崎雅司
宮里明人
村井良樹
村山　哲
森　矢真人
山崎茂樹
山下　清
山瀬晋吾
山田　進
横山豊介
横山祐三
吉居寛子
吉岡　徹

竹谷邦夫
立山美次
谷口淳一
谷村俊英
辻畑隆子
堤　直美
寺山三佳
得能節朗
徳安和博
名嘉地千鶴子
中辻　伸
中原篤徳
中村優子
長岡　強
成冨　宏
野畠耕之介
野原昌代
野間口　泉
野村光雄
馬場正邦
長谷川八壽雄
早川高師
原田治展
原田裕明
一鍬田　徹
平戸司郎
平原孝明
廣川政和
福本重喜
二塚佳永子
堀　龍太郎
堀内有子

川田良樹
河村佳則
木内禮智
木代喜司
九後　稔
久保　浩
工藤　潔
楠元香代子
熊谷喜美子
桒山賀行
小島靖成
佐藤隆男
寒河江淳二
齋藤二郎
齋藤尤鶴
櫻井真理
笹山幸德
柴田良貴
島田見根夫
嶋畑　貢
小代　猛
白石恵里
新澤博志
清家　悟
銭亀賢治
田中厚好
田畑　功
田丸　稔
大丸　敏
髙倉準一
髙野眞吾
髙橋　勇

青山三郎
井上周一郎
伊藤宣郎
伊庭靖二
池川　直
石崎義弘
石田陽介
石原昌一
磯尾隆司
宇治川久司
宇津孝志
上田ふみ
上田久利
上床利秋
江藤　望
江里敏明
圓鍔元規
小関良太
小野啓亘
小比賀　強
緒方信行
桶本　寿
親松英治
加藤幸男
加茂為男
籠瀬満夫
梶川俊一郎
柏原花子
片山博詞
勝野眞言
亀谷政代司
川崎義昭

日展作家は語る

芸術とは何か
創作とは何か

柳　濤雪
山口耕雲
山根亙清
山本高邨
山本大悦
山本悠雲
横山煌平
吉川蕉仙
吉川美恵子
吉澤大淳
吉澤鐵之
吉澤劉石
吉田成美
和中簡堂
綿引滔天

寺岡棠舟
堂本雅人
内藤富卿
内藤望山
中川裕晧
中路佳保里
中野北溟
中林蕗風
中村伸夫
永守蒼穹
楢崎華祥
新谷泰鵬
西村自耕
西村東軒
野田杏苑
野田正行
原田　上
日賀野　琢
日比野博鳳
福光幽石
藤岡都逕
舟尾圭碩
真神巍堂
前島泉洲
松清秀仙
宮崎葵光
村上俄山
望月和風
森川星葉
森嶋隆鳳
森田彦七
八木山鈴

大澤城山
大西きくゑ
大平匡昭
岡田契雪
岡田直樹
岡野楠亭
加藤子華
角元正燦
梶山夏舟
河西樸堂
木村通子
鬼頭翔雲
杭迫柏樹
近藤浩乎
佐々木宏遠
師田久子
師村妙石
清水透石
芝　松翠
陣　軍陽
鈴木春朝
関　吾心
関　正人
田頭一舟
田頭央洩
田中節山
田中徹夫
高木厚人
竹内勢雲
樽本樹邨
津金孝邦
辻元邑園

書
（108 名）

日比野光鳳
尾崎邑鵬
井茂圭洞
黒田賢一
髙木聖雨
新井光風
星　弘道
土橋靖子
赤江華城
明石聰濤
有岡郊崖
井上清雅
伊藤一翔
伊藤仙游
池田桂鳳
石田雲鶴
石飛博光
一色白泉
市澤静山
今村桂山
岩永栖邨
植松龍祥
牛窪梧十
海野濤山
梅原清山
榎倉香邨
遠藤　彊
尾崎蒼石
尾西正成

福田千恵（せんけい）

日本画家
日展理事

葛飾区の静かな住宅街で道に迷った私たちを通りで迎えてくださった福田千恵さん。広々としたアトリエに案内いただくと、まず目に入ったのはアンティークドールと壁に貼られた日展出品作の人物画の大下図。制作途中の薔薇のデッサン。その横にはその時々思ったこと気づいたこと、色の使い方などがきれいにメモされている。描きたいと思ったらまず描いて、それを重ね作品の構想を練っていくとのこと。描かれている薔薇の原木はインド北部やパキスタン、アフガニスタン産だそうだ。薔薇の故郷、ガンダーラの仏像がとても好きで、今はずっとそのことを考え、仏像を見に東京国立博物館の東洋館にも日参されているという。小学校五年の時、博物館で見て描きたいと思ったミイラを近年ようやく描いた。いつもどこかで御縁があるものを描いている。何を描いていてもその心は同じで、描く対象と会話を続けている。

Profile
Senkei Fukuda

1946年、東京都生まれ。67年、佐藤太清に師事。69年、武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業。改組第一回日展「唐簑と花」初入選。81年、第13回日展「紫陽花とテレサ」により特選受賞。84年、第16回日展「単衣の女」により特選受賞。96年、第28回日展「刀匠」により日展会員賞受賞。99年、第31回日展「ながい夜」により文部大臣賞受賞。2006年、第37回日展出品作「ピアニスト」により日本芸術院賞受賞。09年、日本芸術院会員に任命される。現在、日展理事、日本芸術院会員。

多感な子ども時代を経て日本画との出会い

福田千恵さんは、東京都葛飾区に生まれ、その地で育った。父親は車などの輸出金属玩具を中心とした事業を幅広く展開していた。四人兄弟の末っ子としてのびのび育ち子供の頃は踊りの師匠か獣医になりたかったという。

また父親は刀剣協会の理事職をしており、上野の東京国立博物館の中にある刀剣協会にいくのが毎週土曜の午後であった。今、その場所には東洋館が建っている。小学校の時は父について毎週でかけ、協会の仕事が終わる夕方五時までの三時間は博物館の中が遊び場だった。ひとりで展示物の間を回っては小袖などに話しかけ、空想の世界と交差しながら遊んでいる子供だった。

一方、小学校三年から習った踊りではすぐに才能を開花させ、小学校五年で内弟子に入るよう言われた。しかし、中学一年で急性のリュウマチにかかり体育の授業をずっと休むことになりその道はあきらめざるをえなかった。また大の動物好きで、多い時で八匹の犬と三匹の猫を飼っていたが、飼っていた犬が亡くなると一か月食事がのどを通らないほど繊細であった。だから獣医は向かないのではないかという姉の意見に納得し、小さい頃から得意で賞ももらっていた絵を勧められ、絵の方へ進もうと考えた。国府台女子学院中等・高等部に通い、仏教系の学校で、よく休み時間に飛天や仏画などを模写したりしていたのだ。美大受験のため美術教師に相談し、藝大に行っている方に聞いて準備を三年の十一月から始めた。

最初に受験した武蔵野美術大学日本画科に受かり、ほかはもう受験しなかった。水彩絵の具の筆で試験に行ったほど日本画のことは全くわからず、すべてが最初の一歩からであった。そもそも日本画を選んだのは、一度油絵の講習に行ったが、独特の油の匂いになじめなかったためだ。福田さんは日本画で外国の人物も描くが、根本的に日本画のもつ間や空間の処理などを大事にしているところが魅力であり、仏像や仏画も好みで、いまは日本画を選んで本当に良かったと思っている。福田さんの描く絵の対象はさまざまなつながりの中で生まれていく。その話をうかがっているだけでも壮大で不思議な縁でつながっているのを感じる。

一方、大学では落語研究会に入った。子供の頃から落語や浄瑠璃、歌舞伎など古典芸能が好きだったのだ。

さて、大学で日本画を学び始めたが、大学というところは手取り足取りという教え方ではなかった。学期末にこういう仕事はこうだねというくらいで、週に一度助手の人が来ても、あまりこうしてと言われない。スケッチの仕方も十七人のクラスメートがそれぞれ好き勝手にやっているのでどれが本当なのかわからない。こうして四年間やっていただけではどうなるのか、大学は自分らしい勉強をつきつめるようなところだった。ゼロからの出発の者にはどうしたらいいかわからないと途方にくれた。

佐藤太清先生との出会い

家庭では父親から武士道を唱えられ、「お金をお借りしたら万が一返せなかったら門前にて切腹まじきそうろう」と厳しく教えられ育っていた。そこで、プロの先生の門を叩いて教えを乞うてみたいと思い、父親の知人の方を通して、日本画の巨匠を訪ねることになった。児玉希望先生のところに最初お伺いした。まだ二十歳のときで、先生は七十歳くらいだった。それで児玉先生の師弟関係にある奥田元宋先生か佐藤太清先生のところに行ったらどうかと言われ、奥田先生は風景が主流で、佐藤先生は花鳥が主であった。アンリ・ルソーのような夢がある絵が好きで花鳥画が自分の世界に近いと思い、佐藤先生のところに行きなさいとなった。先生のお宅へ伺うと、「嫁入り前までならいいですよ」と軽く受けてくださった。板橋のお宅まで、大学が終わってからお寄りしていた。しかし先生は忙しく見ていただくのはいつも五分程で「これはどのくらいで描いたのか」「学校のカリキュラムで一カ月半です。」「アーそうなんだ、今こういうの描くのか?」というふう

右:「ながい夜」1999年
第31回 日展 文部大臣賞
左:「玉姿」2013年

に、その都度いろいろな鳥や花などの作品を持って行くと「あ、そうか」で良いも悪いもなくて、「奥に家内がいるから良く話していきなさい」と言われ、奥様と一緒にお茶や和菓子などをいただいていた。

佐藤先生のところに通っていた当時はサロメなどを描きたい年代だった。その作品を持っていったところ、サロメの背景の色がまるで血の色に見えて、「黒っぽい血が何で渦巻いているんだ。気持ち悪いな、君の絵は」と叱られて思い悩んだこともある。先生のところでは正攻法の道を教わった。それは絵のもつ気品や気高さなどである。ただ、自分の中には見えないものが見えるというそちらに繋がっている部分がある。それを肯定していただけなくて、「そんなことをしているよりもまず正しい道を学びなさい」と言われたのだ。「今となっては、それは良かったと思います。日本画ではオブラートに包んで思ったことを表現するというのがあり、相手に考えをおしつけないのです。佐藤先生のところで絵の品格や正しい道の部分のもっていき方を学びました」。

「一志不退」
一枚の納得した絵を残したい

そうして、大学を卒業した年に日展に出した初出品が初入選だった。家族皆が祝ってくれた。お祝いで父と姉と三人で出かけた海外旅行で思いもかけない悲しい事故に遭遇する。「それから絵を描くことは悲しかったですが、いまは一生懸命描くことできっと姉は喜んでくれるのではないかと解釈するようになりました。捉え方を変えて。それは時間だったのかもしれません」。福田さんが事務所にされているリビングの壁に掛けられている大きな作品は、「姉が外国で亡くなったときのカンボジアのアンコールワットの拓本なんです。ここが私が絵を始めた原点だから、どうしてもここにたくて」。それから五十年以上の月日が流れた。

いろいろな体験から、花をひとつ描くにしても自分のために描かせていただいているのだから感謝、どんな時でもいい絵を一枚残すことをしていけば、天国の姉が「やるだけやってきたのね」と言ってくれるかなと思えるようになってから、福田さんは元来の自分のほうに戻ってくることができたという。

福田さんが目標としているのは、一枚の納得できる絵である。いつか描けなくなる日が来るのだから、来るまでの間は全力を尽くす。好きな言葉に「一志不退」がある。一度志を立てたら、決して退かず進み続ける。約束志とともに歩めば必ず道は開かれる。きかは決めたら必ず守る。意識の持っていた「人を変えていくようになった。この生で一枚残したい。一枚の絵なんです。絵は誰が描いたんだろう、どうしてこの作品ができたんだろう、名前を忘れられてもこの絵を見たら心が、という絵が描けたら死んでもいい。一生描けないかもしれないけれど、一枚描くことが目標ですから」

毎回、絵を描き始めるときには、必ず白い画紙の前でお辞儀をして「これから描かせていただきます」と言う。紙や道具やいろいろなものと会話する。「画家を職業に選んだらすごく難しいですね」。楽しんで描くだけでなく自分の意志をいれていく。納得がいかなければ、戻していただき手を入れることももちろんある。

一九八九年、三十四歳で日展の会員になったとき、初めて父が「良かったな」と言ってくれたのが心に残っている。

出会いと縁に生かされて描く

福田さんは隣の応接間に案内してくださった。重厚で静かな空間で敬虔な気持ちになる。壁には「比丘尼」が掛けられていた。若い女性の修行僧を描いた作品である。テレビ番組で尼僧の特集を見て、どうしても描きたくなり韓国へでかけた。偶然知った尼寺で声をかけてモデルの許可を得て描いたものだ。背景には水月観音の足元を描いている。この人に会いたいとなれば、海外でもどこへでも行く、この行動力が次々に出会いを生み出していく。

その後、様々な出会いがある。アトリエのなかにはたくさんその出会いのかけらがあるのだ。どの作品にもどの写真にもさまざまなエピソードが秘められている。絵のモデルはモデルを依頼して、ただ来ていただいて描くのではなく、知り合って親しくなってという人物がほとんどである。花を描くにしても、実際咲いている花をデッサンする。実物を描いている時が一番楽しいという。聖母子像の作品もたくさん置かれていた。フランスの木像作品で、美術館で何日間かスケッチした。デッサンさえしておけばあとで日本画作品にすることができる。写真よりも描いた方が後々よくわかるのだという。

「比丘尼」1990年

一九九三年には、渡辺淳一先生の秘書がお弟子さんだった関係から、仕事を紹介していただくことがあり、書籍の挿絵や新聞小説「夜に忍びこむもの」の挿絵を七カ月毎日続けた。毎日の連載でたいへんだったが、文章を読んでどこを切り取って描くかという直感が身についたという。

二〇〇二年、サウジアラビア王「建国の父」と言われるアブドゥルアジズ国王が白馬モニカにまたがる肖像画を描いた。きっかけは河端照孝氏の紹介で肖像を描かせていただいた小長啓一氏にサウジアラビア大使館へのパーティに誘われ、バシール・クルディー大使を描くこととなったところ、今度は大使より、王様を描くコンペに誘われ、五日後にはサウジアラビアへ飛び立っていた。今その作品は首都リヤドキングアブドゥラアジズ競馬場入口中央に飾られている。また二〇一九年には中国天津に取材し、山口那津男先生の依頼により周恩来氏と池田大作氏の対談風景を描き、周恩来記念館に納められている。

幅広い文化人との交流の中で、福田さんの積極的で好奇心旺盛なお人柄、そしてどんなときでも真摯に向き合ってその人をみつめているまなざしが絵の中に感じられる。

二〇〇〇年には雅号を千恵子から千恵に改めた。十五画という画数もよいからと。佐藤先生がつけてくださった。父親に太清先生は「子をとって大人になります」と伝えた。いつもみなさんに千の恵み、幸せがありますようにと願いを込めてサインをしている。

福田さんは自らの作品について、決してきれいごとで絵を描いたりはしていない、自らの体験から生や死を描くという思いがあると語る。「命を描かせていただいているんです。花はきれいだから描いているわけではない。もう二度と同じ形で花が咲くことはない。一度限りの花の命を描かせていただけるのは感謝であり、花も人物も、その時その時で、人物は一年も違えば表情が違う。生きている時の命のどこかを描かせてもらっている。すべてに万物のものに教わることが多い」という。事務所から見える広大な空に浮かぶ雲。その雲の形もどんどん変わっていく。それをありがたく自然体で見る。「生かされているというのはこういうことだなと思うんです」。たった一枚、納得のいく絵が残せれば、名前を忘れられてもこの絵を見たら、という作品が描けたら、その思いが日々の原動力となっている。

「今後は、日展という百年以上続いてきた文化を次の世代へ、自分も一緒に育ちたいし若い人にも育ってもらいたい。方向性はみな自分で決めるけれども、いろいろな作品を毎年見ることができる。昨年からのコロナ禍、また日本で開催されたオリンピック・パラリンピック、それぞれ日々の生活を通し、一人ひとりが積み重ねてきたものを日展という場所で表現してもらいたい。制作時の気持ちはみな同じ。だから、一枚の絵を残したいと強く思っているんです」。

湯山俊久

洋画家
日展理事

横浜市磯子区の住宅街。天井の高いアトリエの壁面に美しく並んだ大小の擦りガラスの窓の外には遠く向こうの緑が感じられる。穏やかな光が差し込むなか、イーゼルや画材など必要なものだけが置かれ、アトリエは静かな気配に満ちていた。フローリングの床は広々している。さわやかな緑の風が感じられる風景画の作品が、この静かなアトリエの白い壁にとてもよく合っている。

Profile
Toshihisa Yuyama

1955年、静岡県生まれ。1980年、多摩美術大学油画科卒業。1983年、第15回日展初入選。1990年、第22回日展「悠想」により特選受賞。1998年、第30回日展「想春」により特選受賞。2004年、第36回日展「爽秋」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「L'allure(ラリュール)」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組新第3回日展出品作「l'Aube(夜明け)」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。

富士山のふもとの自然豊かな地に育って

「太陽の動きに左右されない北窓からの一定の柔らかな自然光が入ってくるアトリエでキャンバスに向かうことが夢でした。受験の時に通っていた予備校のアトリエが、北窓の高い擦りガラスの窓から入ってくる光で白い石膏像の陰影がものすごくきれいだったんです」

さわやかな風景画を描かれる湯山俊久さんは、静岡県御殿場、富士山のふもとの自然豊かな小山町で生まれ育った。通っていた小学校は一クラス三十名程度の小さな学校で、みな兄弟のように、陽が落ちるまで外で遊んでいたという。いつも近くに富士山を見ていた。小学校時代から絵は得意で、校内の写生大会などでは張り切って金賞や特選を受賞していた。

小学校五、六年と担任だった先生が油絵を描いていた。その先生との出会いが湯山さんの人生を決めたかもしれない。先生の描く油絵は、ペインティングナイフを使ってキャンバスに絵の具を塗ったり盛り上げたり、それまで水彩画しか見たことのなかった湯山さんには衝撃的だった。そして魅力あふれる先生でもあった。たとえば「今日の体育は裏山でキノコ採りに変更するぞ」と言われ、みなで行くと、帰りには採ったキノコを手に持ち、振りながら帰るように言われた。菌をばらまけば翌年またキノコが増えるからという理由だった。そうした豊かな教育をしてくださった先生で、その油絵を見てからは、自分で木枠を作り画鋲で布を貼って、その上から水彩絵の具を盛り上げ、油絵のまねごとをしていた。すると、先生は「そんなに好きなら」と、卒業する時に油絵の道具一式を湯山さんに買ってくださったのだ。それからは嬉々として独学で油絵を描き始めた。

そのころから、美術館や百貨店での展覧会を観に行くようになった。印象派やルノワールなど、生き生きとしたタッチの作品が好きで、いつも複製画やポスターを買ってきては部屋の壁一面に貼って楽しんでいた。小学校の先生が絵の具を盛り上げていたのを見て感動したことがベースにあり、絵の具の層の厚みのある作品が好みで、ほとんどが風景画だった。それは現在の湯山さんの作品にも大きく影響している。

「グレー春光」2002年

高校では美術部に入り、初めてみなで東京都美術館に日展を見に行った。かつてのヨーロッパの神殿を思わせる列柱と階段のある美術館の時代だ。展示作品もおごそかな重厚感のあるもので、一目見て日展のファンになった。

また、だんだん芸術、美術、文化に関心が高まり、やはり自分には絵があり、その道に進みたいと思い至ったのだ。それから石膏デッサンを学び、講習会では東京の予備校にも通うようになった。しかし当時の美大は狭き門だった。無念、受験に失敗し、東京に出てきた。そこで知り合った人が、また人生に大きな影響を与えることになる。

ある画家との出会いから、作家を志すまで

上京し予備校に通うなか、秋に上野の東京藝大の芸術祭を見に行った。「校内のアトリエで個展をしている人がいたんです。私の好みに合う絵の具をたっぷりつけたリアリティある作品でした。それでほかの催しを見た後にもう一度観て帰ろうと、そこに行くと作家の方がいらしたんです。住んでいる所が近いこともわかった。遊びに来るよう言われたが遠慮していたら、その方の方から自転車で自分のアパートを訪ねてくれ、多くを語り、それから友好関係が始まったという。

その後、湯山さんが多摩美術大学に入ってからもつき合いは続き、あるとき「今は悩みも多く、もっと学びたい！」という話をしたところ、自分の先生を紹介するので行ってみるかと研究所に誘ってくださった。師匠は坪内正先生という、光風会に所属し、後に日洋会を立ち上げたメンバーの方だった。その先生との出会いがたいへんなカルチャーショックとなった。今描いている絵を持ってくるように言われ持参すると「なんでこんなカッコつけた絵を描いているんだ」と一喝された。そこで先生は持っていたグラスを目の前に置いて、「このグラスを正確に描いたことがあるか?」と言われた。受験勉強のノウハウを学び石膏デッサンや人物画はたくさん描いたが、きちっとグラス等を正確に描いたことはなかったことに思い当たった。それからというもの、先生のおっしゃる言葉の一つひとつが身に染みて心に響いてきた。

坪内先生はたいへん厳しい指導者であった。しかし、その言動のすべてに「作家」を感じ、「こんなに本格的な先生のところに今自分はいるのに、本気で作家を目指さなくてはきっと後悔する、と先生の言葉で目が覚めたんです」。たとえば仲の良かった仲間とのことも、「お前たちは仲が良すぎる。もっと離れろ!、慰めあったり傷口

洋画 ― 湯山俊久

をなめあうような仲ではだめだ。本当のライバルを考えろ！」、ということや「趣味は全部捨てろ」とまで言われた。「絵描きは辛い。その時に趣味が多いとそこに逃げるからたいていダメになる」、「絵描きは華やかなように見えるがそれは展覧会の初日に皆が来てくれる時や授賞式くらいなものだ。日常は重い大きな石を抱えて深い水の中にドボンと飛び込むようなもんだ」と。「ずんずん沈んでいくから苦しくて大概の人はみな途中でその石を離して上に浮かんで息をつこうとするが、本物の作家はそこでぐっと我慢する。それで底まで沈んで、水の底の大地を思いきり蹴飛ばす。そして石を持ったまま水の表面に出て一瞬息をついて、また沈んでいく。この繰り返しだ、石を離さずにおまえら頑張れるか」と。こうした話は、非常に新鮮だった。精神論ばかりではなく、作家としての生きざまのようなものを普段の何気ない会話でたくさんしてくださったのだ。

「l'Aube（夜明け）」2016年 改組 新 第3回 日展 日本芸術院賞

こうして大学時代は授業が終わると坪内研究所に八王子から世田谷までほぼ毎日通い、夜まで描いていた。研究所は先生のご自宅の二階に二十畳ほどのスペースで、洋画だけでなくデザインの人も受験生もいた。

学びを続ける中で、公募展に皆で出すことになり、美術大学卒業の年に白日会に入選した。入選後は坪内先生とは藝大の同期であった会の伊藤清永先生からも厳しい指導を受けた。「東京の第二の先生ですね。ちょっとした心の隙を読まれてしまう。何気ない発言でも浮ついているぞと。もっと期待していたのになんだ！、と」。こうして作家としての精神性を学ばせていただいたという。

一方、通っていた多摩美術大学はモダンな大学で、現代アートを試みる学生も多く、正反対のようなところがあった。皆がモダンな現代的な作品を卒業制作で出しているなか、「自分は農家の納屋のような所に日差しが逆光で降り注ぎ、物が浮かんで見えているという作品でした。今思うと野暮ったい作品だったかもしれないですが、その時の評判はとても良かったです」。

卒業後は絵に専念できる環境を整えた。四谷にある桃園学園、造形美術専門学校の講師もしたが、そこで受験生を教えたことはとても勉強になったという。またデザイン事務所を開いた人の手伝いなどもこなした。そうしてしばらく研究所に通った。

一方、白日会では、中山忠彦先生に薫陶を受けた。出会った先生方はみな本格派で一流であり、当然のように自分も妥協を許さぬ本格的な気持ちに高まっていったと振り返る。そしてその気持ちはずっと変わらない。

風景画と人物画は車の両輪

作品については、公募展の最初は風景画を描いており、日展も初入選は風景画であった。しかし、「『絵描きたるもの人間が描けなくてどうする！』という思いがあり、人物画を描き始めました。風景画も人物画も車の両輪のように、私の大切なテーマです。また妻には感謝しています。当時、勤めていた妻は出勤前の時間にモデルを務めてくれたこともありました。三十五歳で特選を受賞した作品も妻がモデルでした」。

また、衣装で絵の印象が決まってしまうこともあり、衣装には頭を悩ませた。古着屋さんや婦人服の店で、輸入ものを安く買ったりなど、さまざまな工夫をしてきたという。

日展は、高校の美術部で初めて見たときから何度も見るようになっていた。作家をめざし公募展に出すなら最高峰である日展に挑戦してみようと何の迷いもなく思ったという。初入選の作品は、生まれ育った故郷の樹木と遠くに山を入れて描いた作品である。入選はとても嬉しかったと振り返る。坪内先生の指導により、日展には実家の住所で出品した。それは、入選すると地元の新聞が取り上げてくださるからだった。「『日頃親不孝しているんだから日展入選が新聞に出ることで少しは親孝行ができるから』と言われました。そうしたところまで気を使ってくださる先生でした。家族もとても喜んでくれ、特選も早くにいただけて恵まれていました」。

学んできたことを次の世代に伝えていきたい

最近は風景画を自分の原点としてもう一度見直してみようと考えている。生まれ育った静岡県東部は自然豊かな所で、今でも取材に行きます」。

かつて、風景画を描く際に合理的な展開法を考えてみた。まず木を一本、百二十号で描いた。次に二本の木になり、次に三本描いて、その次は林になり、さらに大きな森になって草が生え、水が流れて遠くに山が入って……という考え方で展開していった。また人物画はずっと一人を描いていたが、近年、二人組となって、その作品で日本芸術院賞も受賞させていただいた。

「アカデミックなデッサンをベースにした自己表現は、時代錯誤した古い考え方かもしれないが、そこから見えてくる真実は本物への大きな一歩と確信しています。それを次の世代へ伝えていくことは私の大切な使命だと考えています。これまでに出会った多くの人々に感謝です！」

湯山さんは、また新たなステージを迎え、多くの人の心に響く作品を描き、伝えていこうとしている。

「L'allure（ラリュール）」2010年 第42回 日展 内閣総理大臣賞

彫刻

神戸峰男

彫刻家
日展副理事長

岐阜県の土岐駅から可児市に向かい車で十分ほど、途中で左に折れて急な坂道を登っていくと、木立の中に一軒家が見える。森のなかに聳え立つ天井の高い大きな和風建築は飛騨古川町から移築した、築百五十年の建物だという。明治初期に建てられ、元は医院であったそうだ。吹き抜けの高い立派な柱と梁のある玄関にまず驚き、その後、三方が大きな窓で、森がよく見える天井の高い明るいアトリエに案内された。神戸峰男さんは六十歳の頃中国で一年半教鞭をとり、「西の国から」というシリーズを十年制作、二〇一九年には東岡崎市駅前に高さ九・五メートルの徳川家康騎馬像を納めるなど、数々のモニュメントを制作されている。

Profile
Mineo Kanbe

1944年、岐阜県生まれ。1967年、武蔵野美術大学卒業。1968年、第11回日展初入選。1976年、第8回日展「裸婦」により特選受賞。1978年、第10回日展「裸婦」により特選受賞。1979年、岐阜県文化特別奨励賞受賞。1987年、名古屋芸術大学教授に就任。2002年、中国新疆芸術学院客員教授に就任。2004年、神戸峰男彫刻展（フランス・CITU主催）。2006年、第38回日展「長風」により文部科学大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「朝」により日本芸術院賞受賞。2010年、ユネスコ65周年記念事業・神戸峰男展（フランス・ユネスコ本部主催）。2012年、岐阜県芸術文化顕彰。日本芸術院会員。2013年、可児市民栄誉賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、日本彫刻会理事長、名古屋芸術大学名誉教授。

やきものやの家に生まれて

岐阜県土岐市は、神戸峰男さんの生まれ育った地である。織部や志野など美濃焼が有名でやきものの生産は全国の六割を占めるという。神代の時代から山茶碗などを作り鎌倉時代に盛んになり、昭和五十年代に桃山街道と名付けられた近隣の道から運ばれた。管理する山全体からも窯跡が六ケ所も見つかっているという。

神戸さんは土岐市の街中で先祖からやきものを生業とした家に長男として生まれた。伊勢から移り住んで三百年。親戚一同がやきものに携わり、本人も周囲もその仕事を受け継いでいくものと高校時代まで疑うことはなかったという。従業員もたくさんいた。卒業間際になって「ちょっと東京へ行きたいんだと親に言うと社会勉強のつもりでどこでも好きな所へ行ってこいと言う感じでした。学生生活を謳歌したら家に帰ってくると親は淡い期待をもって送り出したと思いますね」と笑顔。やきものの加藤卓夫さん、鈴木藏さん、加藤孝造さんなど著名な先輩から「やきものをやるんだったら立体的なことを勉強したらどうか」というアドバイスを受けた。「高校の進路指導室にたまたま武蔵野美術大学のポスターが貼ってあって試験は英語と国語と実技だと書いてあったのを見て、ここで四年間遊べるかなと、『ここに入れませんか』と進学の先生に相談すると、あっさり『無理だ』と言われました。『そうですか』と言って、無理と言われるのはいいことですね、『無理ならやってみようかな』と思った」という。高校時代は弓の名手として名を馳せており、朝昼晩に弓を引いていた。奥三河の矢作川のほとりで作られた矢作の矢というのは昔から有名で、その矢で射るのが夢で、三年間一生懸命打ち込んでいたという。また、高校時代の担任の教師が東京での大学時代の話をいつも面白く語ってくれて東京へ行ってみたいという思いも膨らんでいた。だめなら家に帰ってくるだけだと、経験がない怖さ知らずで受けたという。三年の八月にインターハイが終わり東海大会に十月まで出て燃え尽きた。そこからは、教師に「もう教室に居なくてよいでしょう」、「何するんだ」と言われ「学校には来るが

デッサンをします」と言って美術室へ通った。夜行列車で東京に行く夜、美術教師が心配して、名古屋駅まで送ってくれたことがいまでも心に残っている。受験は二月下旬だったが正月に出て行って美大受験用の宿屋に入った。現役生はほとんどいなかった。受験生は五浪から現役まで一畳に一人の雑魚寝、見様見真似で遠慮なくいろいろな質問をした。皆一応に親切に教えてくれた。学科と実技が終わり三次試験の面接で「デッサン下手だね」と言われたが、十倍はある中、なぜか合格。同級生は二十人。学生服を着ていたのは自分だけだった。

武蔵野美術大学で
清水多嘉示先生が主任教授

入学すると、そこで、清水多嘉示先生との最初の出会いとなった。先生は当時日展の理事だったが学生の私は何も意識していなかった。ただ授業は何を聞いても初めてのことばかりで、毎日が新鮮で本当にスポンジのようにいろいろなものを吸収できた。同級生には何浪もしていて芸術論を闘い合わせるような人たちがたくさんいた。そういう人から見れば何も知らなかったばかりに、素直にその世界の中に入っていかれたのではないかと振り返って思う。

こうして充実した六年間が過ぎた。当時は東大を中心に学園紛争の最中であった。学校はロックアウトにあい、授業もままならなくなった。そのままいることもできたのだが、故郷へ帰ろうと決意したのは二十四歳のときだった。清水先生に挨拶に行くと、「風土に学べ」と言う意味のことをおっしゃった。これはフランスの彫刻家ブルーデルが清水先生に贈った言葉であった。「日本の中で培われてきた造形、それから習いなさいということ。このブルーデルの言葉を、田舎に帰る僕に贈ってくれました」。それから神戸さんはずっと生まれ育った地元を基盤に活動を続けている。

二十五歳のときには名古屋芸術大学から助手として採用され、約五十年間、七十四歳までずっと学生と共に過ごした。依頼を受けた当時、教授陣には若い学生気質を理解する人がいなかった。学園紛争の余波は名古屋まできていたという。そして、彫刻を取るか家業を取るかの選択があったが、勤めを始めたこともあり、家業にはまたいつでも戻ることができるということで、教

「麒麟児」2019年 改組 新 第6回 日展

「忍」2018年 改組 新 第5回 日展

職と制作活動を中心とした生活に入った。

また大学に勤めながら多くの仕事も受けた。時代は高度成長期、ビルの建築ラッシュであり、ビルを装飾する需要が多くあった。学生時代のアルバイトの経験も大いに役立った。北は北海道の大雪山から南はシンガポールまで忙しく飛び回った、ソウルオリンピックの準備のために、二年間毎週末にソウル・プサンへ通うということも続けた。しかし、ソウルオリンピックを機にこの仕事はこのあたりにしようとなんとなく思った。四十四、五歳の頃である。それからは彫刻のみにシフトした。「学生時代を含め毎日が楽しくて、仕事が苦しいという感じは全くありませんでした。行った先々で多くの出会いがありますしね。仕事は工夫ですから。工夫が楽しくて、いろいろ現場で仕事をしてきました」。この工夫というのが神戸さんの仕事の大きなキーワードと思った。

二〇〇二年には中国新疆芸術学院の客員教授として招かれ、二〇一〇年には、パリ・ユネスコで日本人の彫刻家として初めて展覧会を行った。また、二〇二一年六月には理事長を務める日彫展五十周年の記念展を日仏会館で開催し、日本の近代彫刻の源流をたどる企画を実現させた。実に幅広く精力的に活動を続けてこられた。

日展での活動五十年を振り返って

さて、振り返って日展との出会いをうかがった。故郷への帰郷を決めると、恩師の清水先生からは「作ったらまたもっておいでよ」という一言をいただいた。「できたらまた見てあげるから」と。そんなことがきっかけで、日展の理事を中心にとても活躍されていた先生だったので自分もそこへ出品してみたいなというのはあった。ただ、当時、岐阜から作って東京へ持っていくのはたいへんだった。搬入業者さんなど当時は知識がなく、自分で持っていける大きさと思い、夫人の首をひとつ作ってそれをもって東京へ行った。「日展の先輩からは大家ならともかく、初出品で首を持ってくるのはいかがなものかという声があった。しかし清水先生は『いいじゃないか』と言って引き取ってくださり初入選となりました」。それが大きなきっかけとなった。二十五歳のときだ。それから一度も欠かすことなく出品を続けているという。「日展が受け入れてくれたおかげで制作がやり続けられました」。その間に仕事として壁画も作った。そんなことで、日展との出会いは故郷へ帰ることが一つのきっかけとなった。

ムサビの学生仲間は当時先生たちが学生から吊るし上げとなっているような学園闘争のなかで、「日展」を言葉に出すということは保守的と非常に揶揄された時代であった。しかし、神戸さんは逆に「私は日展に出品してみよう」と意思が固まったという。常に逆転の発想と強い意志で、しかも笑顔で人生を切り開いてこられた。

清水先生は厳しくも、ある意味では優しい先生であったという。当時から日展に若い人は少なかった。学生時代から日展を見てはいたが、まさか自分がその中で五十年続けていくことになろうとは思っていなかったという。

振り返れば「自分自身の方向性を探るということで、人との競争ではない、自分のやっていることに対する確認といいますか、テーマはそれぞれですが同時代にいる人が、どういう作品で自身を表現しようとしているか。日展の作家は彫刻だけで二百人以上います。それらを観る機会が持てる。公募展というのは僕にとってたいへん大事な研究会です。自分の仕事を相対的に客観的に見る機会が増えるだろうということで疑いをもたず展覧会に出し続けてきました」。

窓の外の緑を背景にした広々とした明るいアトリエには、いくつもの彫像が並ぶ。制作についての特徴をうかがった。

「粘土で作って石膏にとりますが、僕の場合は石膏にとって終わりということはありません。石膏にしてからの仕事が数か月以上続くこともあります。全て自分の仕事です。石膏にとって塑造の味を殺さないのが塑造彫刻の主流ですが、僕の場合は石膏にしてからの仕事の方が多いし、石膏の直着けを楽しんでいます。粘土のときにわからなかったことに気づいた場合はどんな形にでも変えます。仕事はすべて自分の責任の中でやっていこうと思っており、それが面白いところなんです。どっから見ても彫刻にしなくてはいけないんです」。最初から最後までを一人で完結する、これは神戸さんが貫かれている姿勢である。今後についての抱負をうかがった。

「確信を持ち深めるために更に何かを追い求めたい。自分自身に確信が持てるためには、今何を求めたらいいのだろうか、結局それがないと続ける意味がないと思うんですね。自分自身の次の仕事に期待をして毎日いるわけですが、次の世代の方に「彫刻とは」と言うことを伝えるためには、私の美術史観を確信し、それを彫刻の言語として、出していければと思っています」。

改組新第七回の出品作「烽火なき世を求めて」は、世の安寧を求めて作られた。そして今年はその続きを制作中である。「昨年はすっと静かに、今年は舞うように。伝統的なスタイルを借りて何か平和な世の中をもとめられないかと思って制作しています」。

思いきり制作に専念したいと里山に移り住んで二十数年。森の中のアトリエの明かりは今日も夜半を過ぎてなお、煌々と灯っているのであろう。

「朝」2008年
第64回 日本芸術院賞

追悼

武腰敏昭

陶芸家
日展理事

石川県南部、加賀平野の中央に位置し、北は日本海へと手取川が流れる能美市は、明治の頃から九谷焼の中心地として栄えてきた。広がる田園に高く低く飛ぶサギを見ながら静かな住宅地をゆくと「陶房武腰」という看板が掲げられた工房が見える。迎えてくださった武腰敏昭さんは、九谷焼の窯元の三代目である。

このインタビューは二〇二一年六月十五日に行われました。取材後の七月二十八日に急逝されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

Profile
Toshiaki Takegoshi

1940年、石川県生まれ。金沢美術工芸大学卒業。1963年、第6回日展初入選。1980年、第12回日展「容」により特選受賞。1986年、第18回日展「蒼い花器」により特選受賞。2001年、第33回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2010年、第41回日展出品作「湖畔・彩釉花器」により日本芸術院賞受賞。日展理事、日本芸術院会員、金沢学院大学名誉教授。2021年7月、逝去。

九谷焼の産地で、ぐい呑みから環境造形まで

能美市に生まれ育った武腰さんは子供の頃から絵が好きで、中学・高校時代には京都や東京へ日展を見に行っていた。三山と言われた先生のなかでも、いちばんデザイン的な杉山先生の縦と横の構図が好きだったという。石川県立工芸高校のデザイン科を卒業し、金沢美術工芸大学のインダストリアルデザイン科に進んだ。当初は工業デザインの方向を目指していたが、三年の終わりに陶芸家の北出塔次郎先生から「出身の能美市は焼物の産地だから焼物をやったらどうか」と言われ、一室をもらって始めた。

こうして陶芸の道へ入ったが、三、四十代のころは抽象的な立体造形を中心に作っていた。形態にウエイトを置き、突き詰めていくとそこに文様は入らなかった。最初の日展特選作品も抽象的な作品だった。「今はオールマイティにろくろ成形もあるけれど、僕らの時はそうではなくて、また逆に山崎覚太郎先生が『用からの離脱』ということをおっしゃり、オブジェの世界に入ってきました。それで、物を表現する時に『平面的造形』という言葉を作りました。頭の中で想像できる、図面に描ける形があるんです。そういうものなら、時代の九谷焼の絵付けを生かすことができるということで研究しました」。昭和三十二、三十三年前後、アメリカで活躍したフランスの工業デザイナー、レイモンド・ローウィが「口紅から機関車」までと言っていた。「それにちなんでわたしは、『ぐい呑みから環境造形まで』と言っています」。武腰さんの仕事は実に多彩である。焼物を基本にぐい呑みから巨大な十五メートルのレリーフまで制作してきた。

「僕らは初めから最後まで、作品ひとつ作るのに時間かかりますね。二、三点作らないと、とくに磁器の場合は収縮度が激しいからゆがんだり割れたり傷が出やすかったり、途中で絵が失敗したりあるから」。この地区は色絵の産地で、九谷焼というのは磁器で色絵が入って初めて九谷焼と言える。武腰さんはさまざまなモチーフを探す。武腰さんの作品には特に鳥が多い。「子供の頃から親父が鳥をつかまえるのが好きで、鳥まで育てました。デザインする時には大きなものを小さくするのはできますけど。花瓶一杯にスズメを描くのもおかしいし、自分でデザインした『王鳥』という鳥のシリーズは何年か続けています。人間は生まれたときは母親の顔を見て、そこら辺の風景を見ながら、花や鳥の世界にいく。その中で一応全部やってみたんです」。

応接ギャラリーには、四方を囲む棚にさまざまな絵が描かれた作品が並んでいる。歌舞伎、勧進帳の弁慶を描いた作品。中近東の風景は日展出品作。「生で描くのではなく、頭の中でぼやっとしたものを描かんと作品に近づかんのです。そこら辺がなかなか難しい」と言う。龍の作品は自分が辰年だから描いてみた。自分が描きたいもの、やってみたいものがあったら写すが、他の人がやっていたのではないかと思ったら止める。人と同じものは作らないのが基本だ。手水鉢のような大きな器の底には、水戸光圀の言葉「吾唯足知」が書かれている。「人間は足りると思ったら足らないし、全然満足しないという意味らしいけど、みんな遊びでやっているんです」。武腰さんの話にはキーワードが次々飛び出す。たとえば「近技離感」。「とにかく焼物は近くで技を見て、離れて感性を見るんですね。この人は構図とか描写力とか形態とか見る力ができているかなと。技と感性がなければ、一つのアートとはいえないのではないかなと。いつも『近技離感』という言葉を使っています」。

「一窯一試」。一回の窯をたく時に必ず一回試しをするというもの。そうでないと窯をあけるときの感動がない。同じものばかりやっていたら想像がつく。違う表現をしたり、違う釉薬と釉薬の合わせたものをしたり、常にいろんなものを試す。しかし、「失敗がほとんどなんです、七割失敗している。今まで五十七、八年それはもう車に一台分捨ててきました。でも今思うと失敗は逆にいいことと言うか、ある一面失敗一回すると同じことをもうしないから、その方が評判高まるのでないかと思ったり。これが売れたと思ってもう一度して同じものが何枚もあると評価が下がると思ったりする。失敗というのは、そこでそれを辞めるからある意味大事なものかもしれない。とにかく僕は五、六分で表現するんです。失敗するなら早い方がいいと思って、行けそうなものだけ少し時間をかけて大きく伸ばす。失敗したものの色味など人が見てもわかない。でも何かあるとそこが気になって寝られないからこれは直らないと思ったら即止めて

「無鉛釉薬『王鳥』」2016年 改組 新 第3回 日展

「無鉛釉薬『朧げな記憶』」
2019年 改組 新 第6回 日展

次にかかるというか。早く判断するということが大事」。常に工夫し作品を早く判断し、勝負をかけていくなかで名品が生まれていく。作家のモノづくりへの厳しさを強く感じた。

「我が人生ドラマのごとし」

「『我が人生ドラマのごとし』と自分では思っている。農家の息子が武腰家ってとこに養子に入ったの。要するにとくに焼物好きでないのが焼物やりだした。絵は好きだけども焼物は酸化金属で色を発色させるから、自分の思う通りの色が出ない。グラデーションかけようと思ったらコンプレッサーを使えばいいが、嫌いなんです、機械的で。やっぱり呼吸している人間の技みたいなのがそこにないとどうしても自分としては納得いかないというか。だから、人に頼まれながら物を作ったりする場合以外は自分の好きなものを描いています」。

これまで作った作品は、小さいものを含め何万点。叙勲や結婚式など記念品も頼まれる。「命を縮めたのはジャンボオブジェです。あれだけは。自分が亡くなったら車をあそこで止めて警笛ならしてくれと言っているんです。いろいろ作って今後はやることなくなってしまったんですけど、毎晩作品のことを考えています。振り返れば辛い世界というか二十四歳の時に両親亡くしたんです。女房とふたりで苦労したというか。おばあちゃんが姉妹で女房とは又従妹なんです」。

無鉛釉薬

武腰さんの取り組みの大きなひとつに十五年ほど前から行っている無鉛釉薬への切り替えがある。鉛は体に有害なもので、自分の合わせた釉薬や過去の釉薬を試した。酢のようなものの中に常温で二十四時間入れて抽出される鉛を検査すると、ほとんどが基準の五十倍から百倍出ていた。九谷焼技術センターと共同でそれをゼロにすべく開発した。それからまた自分で調合し、いろいろな絵の具の発色になる。無鉛釉薬推進委員会をつくり、表彰も受けた。

しかし難しいのはその家ごとに歴代の絵の具があるので、なかなか無鉛に替えてもらえないことだ。鉛のほうが安価で、無鉛釉薬は二回ほど窯に入れなければいけない。そのため電気料金が高くつき無鉛釉薬の基礎釉自体も普通の釉薬の約二倍と高価。しかし武腰さんは体に良いものをという信念で進めている。

陶板の巨大壁画

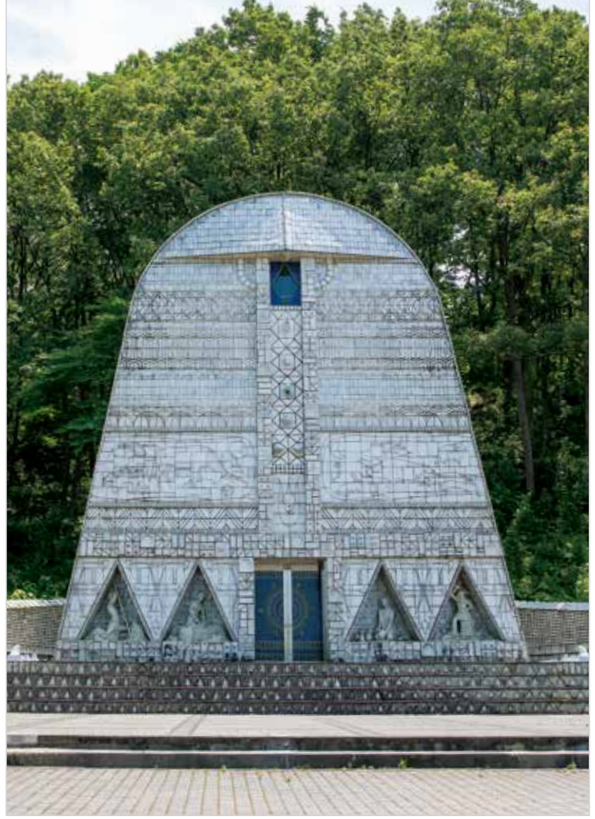
一方、武腰さんは壁画作品も多く残している。これまで二十作品が石川県内を中心に納められており、その中で最大のものが能美市丸谷陶芸村にある巨大な陶板レリーフ「『甦』 世紀をこえて」だ。高さ十一メートル、能美市は古墳の町でもあったので銅鐸状の形態をとった。アールのかかった立体に陶板を六万枚貼り、五年の制作期間を経て一九九三年十月に完成した。時代を超えて残っていく作品は鋭角的だと壊されてしまうと考え、アールにこだわった。そのなかに、昼行性と夜行性の動物や生命力を表す炎や角、水流門と大地、森羅万象を表すさまざまな表現を施した。人物の彫刻は彫刻家に作ってもらい、能美市で出土された六鈴鏡もモチーフに入れた。二十分の一のエスキース、モデルを作って進めていった。

壁画作品の制作は昭和五十六年からで、和倉温泉の加賀屋旅館の壁画が最初である。また大学構内に高さ十四メートルの壁画もある。壁画は建物の使命と併せて作るという。病院なら病院のスタイルで、看護師や患者が見て落ち着くもの。企業の依頼で、世界に伸びていくイメージでウエストミンスター寺院をモチーフに表現した。斎場の壁画には、日本海から見た手取川と平野が広がる能美市の情景を描いた。またクルーズターミナルには上から見た斬新な絵柄のクルーズ船を縦に描いた。

こうして若い時はほとんど壁画の世界にいたが、リーマンショック以降止まってしまい、従来からの九谷を自分なりに表現したものを作るようになった。壁画と無鉛釉薬、我が人生のあゆみという展覧会を地元で七月二十日から予定している。

仕事場を見せていただいた。粘土で造形し、焼く場所と、絵付けをする部屋が分かれている。大きな窓に向かって大きな机で絵付けを見せてくださった。

細い筆でないと、絵の具を含まない。「細筆だと溜まって落ちてきやすいんです。二、三度窯に入れたりも、薄めに仕上げていないと失敗する。こっちを薄くこっちを濃くしたいとか、ここは一度で終わりここは二、三度とかするんです。きれいにやりすぎると職人的だと言われる、心臓が鼓動しているようにへこんだりふくれたりするほうが、生命力があると言われる。手わざをそのまま残しておかんと。僕はどうしてもきれいにやるくせがある。五十八年間、こんなことやることに慣れてしまって」と笑う。



「『甦』 世紀をこえて」1993年

封筒や紙の裏に描いたデッサンが積み上げられていた。九谷焼絵付けの基となっているスケッチだ。魚や動物、鳥。虫、花。弁慶。傘。河童、辰、きじ……。構想の段階に一番時間がかかる。「そこをまとめないと最後に失敗する、スタートが一番大事。いかに失敗を早くするかです。作品作っているときの方が体の調子がいいですよ」。

いろいろな人との出会い、言葉を雑記帳に

物を描いていると不思議なことにたくさん出会うという。「雪月花という言葉は四季を表します。曹洞宗の道元禅師の総本山は福井にありますが、『春は花、夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり』という句があり、雪月花は冬秋春で、なぜそこに夏がないのかと鶏を描いてみたり」。古文からも題名を取らせていただく。「春来たるらし」という王朝のような鳥を描いたことも。万葉集の持統天皇の和歌「春すぎて夏来たるらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」からだ。書道の先生からもいろいろな言葉を教えてもらった。「だから日展にいたことを僕は誇りにしている。いろんな人からいろんなことを学べ、先生方の仕事も拝見できたり、お言葉を聴いたりして、そういうのをみんな雑記帳に書き留めてあるんです」。松下幸之助の「縁あれば花咲く恩あれば実を結ぶ」や、加賀屋旅館の「まね、慣れ、己」、真似から始まってだんだん慣れてきて自分を出すことなど。自分の生涯に残す雑記帳で、わからないことはみなそこに書き込んでいく。

「日展作品は春ごろから取り組み、何点か作ってみておもしろいもの、今まで出品していない角度からとらえたものを出品しようかと思っています」。常に新たなモノづくりへと意欲的である。

窯には一点しか入れないという。「二点入れて二点割れたらたいへんだから。一点に平等に熱がかかるように。今日たきますと明日で一日おいて出すので四日ほどかかりますね。焼物は、重さを支えるために下が厚くて上が薄くします。ただ上と下との薄さが違い過ぎると窯から出すと割れるんです。手で触れるくらいに冷ましてから窯から出します。それは、癖ですから、あわてて失敗するより『急がば回れ』と言うか」と笑う。五十八年間、常に新しいものを目指して向き合ってきた。丁寧に語ってくださった言葉ひとつひとつに静かな重みを感じた。

高木聖雨

書家
日展理事

閑静な住宅地のなかにモダンな佇まいの落ち着いたご自宅である。案内いただいた応接にはさまざまな中国の器物が並んでいる。隣の二間続きのフローリングの部屋がアトリエ（道場）で、書棚には参考書籍がびっしり並び、壁には書画が掛けられている。奥の部屋には悠久のときを刻む中国の青銅器が並ぶ。三千年ほど前の文字がそのなかに彫られているという。中国への研讃の旅は二百五十回ほど。師である青山杉雨先生と父親から本物を見て学ぶことを学び、気をもらってその中で書作を行う。

Profile
Seiu Takaki

1949年、岡山県生まれ。青山杉雨、成瀬映山に師事。73年、大東文化大学卒業。74年、第6回日展初入選。89年、第21回日展「天馬」により特選受賞。93年、第25回日展「建始」により特選受賞。2006年、第38回日展「協穆」により日展会員賞受賞。15年、改組 新 第2回日展「駿歩」により文部科学大臣賞受賞。17年、改組 新 第3回日展出品作「協戮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、謙慎書道会理事長、全国書美術振興会理事長、大東文化大学名誉教授。

書家の父に反抗した十八歳まで

「僕はそもそも子供の頃から十八歳まで書道をやろうという気は全くなかったんです」。かなの大家である高木聖鶴さんを父親にもつ高木聖雨さんの第一声だった。

「父は書に命を懸けていた人で、昼間は祖父がつくった証券会社で仕事をし、五時に帰って食事をしたら夜の二時三時まで部屋から出てこない。ずっと書を書いたり本を読んだりという生活でした」。幼い頃から両親と出かけた記憶もなければ父親との会話もなく、一人っ子だったが毛嫌いしていたという。反発心から高校時代はサラリーマンをめざしたが大学に一浪。「学力も伸びず考えた末、父親に『書道でもやろうかな』と言ったんです。そしたら『けっこうです。やらなくていい』とぴしゃりと言われた。その後叔母から、父は『書道でものデモ』をつけたのが、許せない。『ほんとにやるならデモを撤回しなさい』と言われ、改めて、父に『今後書道をやっていきたいと思うんでどうですか』と言ったら『やるんだったらどうぞ、手助けはしない』と。父親としてはまだ信じられない状態だったのでしょう。書道が最も盛んな大東文化大学に入らせていただきました」。

岡山・総社市から東京へ出て初めての一人暮らし。大学に入ると、各県で名をなした高校生ばかりが集まっていた。書道用語も全く知らず友達に聞くのも恥ずかしい状態で、実家に電話を入れて、半切や落款の意味を聞いたのが書道についての初めての父との会話だった。それまでは父の部屋には一切入らず道具も見たことがなかったが、父は本物主義で、平安時代の古筆などを集め、勉強していた。今になって素晴らしいと思う。亡くなった後、平安から江戸までの古筆コレクションを東博と九博に百点ほど寄贈されたという。

師　青山杉雨先生との出会い

書の道に入るにあたっては漢字を選ばれた。「これも親に対する大きな反抗なんです。書をやっても絶対に〝かな〟だけはやらないと父に宣言して出てきましたから。

ただ、自分で師事する先生については、自分で決めて相談しました。入学間もない五月のときです。大東に入った時点で、書道の専門家になろうという気持ちでいました。だからその時点で書家希望です。ただ同級生とは技術に歴然と差があり二倍三倍の努力をしないと追いつけないし、追い越せないと思いました。とにかく早く先生につきたい。大学の授業で遠目から見た青山杉雨先生にはオーラがあり、若くて書壇で名を成して、この先生につけば間違いないと思い、先輩を通してお稽古に連れていってもらいました。先生には二年間高木聖鶴の子供だと言わず、父も、休まず稽古に通っている状況をみて初めて、青山先生に挨拶に行ったんです」。厳しくも優しくもいろいろなことを教えていただいた二十三年間で、稽古を休んだのはたった一度だけ、祖母の葬儀のときだった。大学からスタートした書道で、どのような努力を重ねられたのか。

「ひとつは、枚数を書きました。数を書く。技術の鍛錬ですね。先生から毎回いただく三枚のお手本を一枚につき二百枚、三種類で一週間六百枚、卒業するまで四年間書きました」。その日書けなかったら翌日倍の枚数になる。「僕は一生懸命という言葉が好きで、一生命を懸けるわけですから、大事なことです」。

もうひとつ良かったのは、青山先生に師事するまで誰にも習っておらず、手癖がついていないことだったという。先生の言われることが素直に受け入れられたのは非常にラッキーだった。「父親に対する反抗心と挫折。そこから書道を始めたようなものだと思っているんです。高校時代は親や家族皆を苦しめてしまって、順風満帆でどこかの大学の経済学部に入っていたら書の道はなかったわけです。やんちゃして挫折したほうがいいときもあると思いました」。

青山先生の稽古は厳しく、四、五十人の指導は一時間ほど。朱墨で丁寧に直すのでなく、ただ「考え直せ」と言われ、どこを直せばいいのかを弟子は自分で考えなければいけない。そして次の週に直っていなければ激怒された。「簡単に教えてしまったら考えないから」と先生はおっしゃる。「一本の道があって則を超えず」。ぎりぎりのところまでは許されるが行き過ぎはいけな

「黎明」第82回 謙慎書道会展

「悠久」第82回 謙慎書道会展

い。こうした先生の理念を守りながら、理想を入れ、自ずと独自の書が生まれてくるという考えである。

書道には篆書、隷書、草書、行書、楷書の五体があり、これを大学4年間で徹底的に学ぶ。展覧会でバラエティに富んだ書体があると見る人は楽しい、そうでないと書道芸術といえないという指導法で若い人を育てた。当時はベビーブームで競争相手が多いことも良かったと振り返る。書道部で五〇〇人。青山先生の学生の門人は一年生から四年生まで一二〇人。「先生は常に献身的に教えてくださり、その人たちが弟子を育成し、日展などに出品し、枝葉を広げ会が発展しています。それが青山先生の大きな功績だと思っています」。

一二〇人の中には先生と一言も話さず卒業する人がいるほどで、いかに先生と会話できるかを模索しなければならなかった。三年のときに幹事長となった。青山先生は中国の掛け軸や青銅器など積極的に集められおり、作品や作家について説明されるが、誰も話に食い込んでいかない。そこで、すぐに書画研究会を立ち上げ、一年ほど経って先生と書画の対話ができるようになると、先生から「いい作品が入ったから見に来なさい」と言われるようになったのだ。自らも中国の書画や器物を集め、教えを乞うた。「掛け軸が出す〝気〟というものは間違いなくありますね。書斎を整え雰囲気を作り、部屋に気が充満したときに字を書くといい字が書ける。それが青山先生の理想でした。父親もそうです。平安時代の本物を見ないと良い字は書けないというのが理念でした。学生によく言うんですが五百円の食器でもきれいだと思ったら、それでご飯を食べるとおいしいでしょう。それが気なんです」

日展との出会い、大学三年から出品

「父は書が日展に入った昭和二十三年頃から出していて、秋になると日展に入選したら、特選など話を聞いていました。母から日展の発表があった後、父親がふとんのなかで悔し涙を流していたという話を聞いて大変な展覧会だと思っていました」

青山先生に師事すると大学の三年生から日展に出すように指導される。「最初の三年は落選しました。二十四のときに初入選、二年落選して、その次に入ってまた次の年も選、だから落選が六回ありますね。これも順風満帆で行くよりは苦労して、日展はそんな甘くないというのを教え込まれたわけで、落選があったからこそ、今の私があると思っています」。

書道人生の転機は大東文化大学に入った日、それから日展の初入選の時ですかね。「当にうれしかった。書道の場合、入選は本人にひとり。いかに日展に入るのが難しいか。落選した人はこの次こそはと頑張る展覧会ですからね。人を成長させてくれる展覧会。悔しい思いをしたり手放しで喜んだり、ひきこもごもの日展出品に対する思い入れが交差していきますね」

「君は篆書の大きな字を書きなさい」

日展はひとり一点の出品である。その中でも得意とする分野を出さなければいけない。最初は隷書で多字数で出品。二年くらいして、青山先生より観る人が会場内に大きな字が点在すると楽しく鑑賞できるということで篆書の大きな字を勧められ、二文字で書くようになった。

三千年前の古代文字を現代風にアレンジして書く。「ちょっと絵画的になりますが、あまりパフォーマンス的にせず骨格だけはしっかりと守る。絵は遠近法や色で表現するが書の表現方法は白と黒のせめぎあいで、白を生かすには黒が必要、黒を生かすには白が必要。すると書は反対語、白と黒、太い細い、短い長い、広い狭い、両極の美なんです。例えば細い太いだけでは表現が乏しくて見た目に寂しい。あまり両極を入れすぎると表現過多、嫌味なものになる。いかに好加減に示すかは作家の技量です。私の場合、作品によっていずれを取り入れるか重要なポイントで、文字の大小、粗密、線の太細、潤渇を考えます」。

選文はまず二文字の場合なら見栄えのする字を一文字探す。そして大漢和辞典から良い意味で鑑賞者に理解できる熟語を探し、10Bの鉛筆で、字書を引きながらデッサンをする。「縮尺率を同じにした小さい紙に、ここは黒くする、太くするなど注意書きを書いてから、実際に大きな紙に書いてみます。ただ、精神的なものや感性があり原稿どおりにはいかない。同じに書いても逆におかしく、そこから違ったものが生まれないと書の楽しさも出てこない。書道のお手本は一つの弊害だと思っています。手本より絶対うまくなるわけがない。青山先生には何十年も習って展覧会の手本は大学時代二枚書いていただいたのみ。あとは自分で創作していくんです。それが個人の技量を伸ばす一つの要因になると思っています」。

「天馬」1989年 第21回 日展 特選

二番目のポイントが特選であるが、「天馬」ペガサスは思い出深い作品だ。四十歳の頃、青山先生の家を改修するときに仕事を辞めて四十日間手伝いに通ったことがある。稽古日以外に作品を見せるとルール違反だが「叱られても」と思い、まずは鉛筆で原稿を書いて数枚持って行った。先生にこの原稿で書くよう言われ、鍛練を重ね、特選をいただけたという。「意欲を感じていただいたんでしょうね。また二回目の特選では、たくさん書きましたね。先生が亡くなった年でした」。

また、初入選ですが、その意欲を見せよと五種類の原稿を先生に見ていただき、一種類を決め、二か月で六百枚書いた。しかし結局最初の草稿が初入選だった。「あの五百九十九枚は無駄ではないですが、偶然出た線が最後まで表現できなかった。偶然が度々出るには鍛錬しかないんですね。その時強く感じました」。

生涯現役という気持ちで

日展以外では、日本の書道文化のユネスコ無形文化財遺産登録運動を進めている。このたび国の文化財保護法に登録されることになった。

「作家ですからまずは技術を磨き、いい作品を書くのは大前提。まだ七十なら書道界では若造ですから、書道界の繁栄ために一生懸命働くのが今後の使命だと思っています」

また、大切にしている言葉がある。父親の言葉で、「人間はストップするからいつも不足不足という気持ちで人生を過ごす」こと。また、尊敬する奥村土牛先生の「芸術において完成はない。いかに未完成で終わるかが大切だ」という言葉も、何かもっとよく書けるのではないか、もっと工夫すれば変わるのではないかといつも考える。「佐賀県の藩主が書きとめた葉隠れのなかに、『人生不足不足と思って亡くなったときに初めて成就した』という文章があり、そういう生き方をしたいと思っています。青山先生は『生涯現役』とおっしゃいました。死ぬまで良い作品を書くという気持ちをもって、頑張っていきたいと思っています」。

日本画

米田 実

日本画家
日展会員

京都市伏見区の住宅街、モダンな明るい自宅の二階奥の部屋がアトリエである。壁一面に色とりどりの絵具の瓶がずらりと並んだ棚が目に飛び込んでくる。この棚はご自身で設計し注文されたという。米田さんは京都生まれの京都育ち。ご実家も近所にある。「京都は私にとって居心地がいい土地ですね。頼りになる絵具屋さんも多く、描きたい題材も学ぶべき作品も豊富にある。おなじ日本画の人も多いですし、そういう点で恵まれています。そんな京都に魅せられ暮らしている作家は多いのではないでしょうか」。これまでの制作や今後の抱負などについて、幅広くお話を伺った。

Profile
Minori Yoneda

1972年、京都市生まれ。96年、京都造形芸術大学美術科日本画コース卒業　学長賞。2001年、日春展入選　09年、日春賞、09年、外務大臣賞、07、10年、奨励賞。01年、日展、京都新聞社賞、08年、巡回展選抜　09、12年、特選。04年、川端龍子大賞展　佳作。05年、京都日本画家協会選抜展　京都日本画家協会賞。06年、雪舟の里総社　墨彩画公募展　奨励賞　同08年、入選。09年、日本画新展（美術館「えき」KYOTO）16年、現在日本画研究会11人の拓く日本画の現在（東京都美術館）。17年、現在日本画研究会　東西日本画10人展（橋本関雪記念館）。17、18年、アフリカ・ザンビア　学校交流、写生取材。20年、日展審査員。現在、京都先端科学大学附属中学校高等学校　美術教諭、京都芸術大学美術科日本画非常勤講師。京都日本画家協会会員。日展会員。日春展会員。

テキスタイルデザイナーの父の影響

父親は京都で名の通ったテキスタイルデザイナー。服地のデザインやカーペットの絵柄を描く仕事をしていて、子供時分からその仕事ぶりを見て育った。別邸にアトリエがあってそこに行くとアクリル絵具が置いてあり、自分も使ってみたいと思った。父は京都・日吉ヶ丘高校の出身で、高校時代は日本画を描いていたが、その後、デザインの道に進んだ。注文を受けたものをかたちにするという仕事だったが、自分は自由に描きたいという思いもあり、京都市立銅駝美術工芸高等学校の日本画コースに進んだ。

「日展には父の同級生である竹内浩一先生、渡辺信喜先生、堀泰明先生などが出品されていたこともあって、物心つくころから通っていました。その影響もあり、大学は、京都造形芸術大学（京都芸術大学）の日本画コースに進みました」。

最初は、草花や樹木などを描いていたが、大学を卒業した頃から次第に動物を描くようになった。スケッチをするために、たとえば静岡にオランウータンを、広島に水牛やライオンをというように、時間をみつけては全国各地の動物園めぐりをした。ネットで調べて、気に入った動物がいる動物園に出向く。ときに期待外れもあったが、そういうときは別の動物を描くこともできるし、何かしらの収穫は持ち帰る。写真も撮るが、スケッチブックに写生をするのが基本だ。帰ってから着色をしたりイメージを広げたり、また、観察し足りない部分があれば何度でも見に行く。

猫その他の小動物はあまり対象にはしない。どちらかというとヒョウやライオンなどの「イカツイ」動物が好みだ。そのほうが絵になるということもあるが、「日展には大きな作品を出しますから迫力もほしいですし、自分にないものというか、そういうものを求めているのかもしれません」。

日展と現在日本画研究会

米田さんと日展との関係は、大学卒業前後から始まる。もともと公募展に興味があり、また幼いころからずっと日展を見ていたということもあり、たえず仰ぎ見る存在だった。日展に出展するようになって以来、坂根克介先生に久しく師事してきた。坂根先生は金沢美術工芸大学を出られ、千手観音菩薩などの作品で著名な日本画家だ。坂根先生とは母親の高校時代の同級生というご縁だった。無所属だった米田さんは、日展の習わしから制作上の留意点に至るまで懇切丁寧に指導してもらったという。そしてなにより絵にかける情熱を学んだことは大きかった。

日展に応募するのは大いなる挑戦だったと振り返る。「最初のころは、落ちたり受かったりでしたね。組織にこだわりたくなかったので、特定の団体には所属しませんでした。とにかく大学卒業後は、大学の非常勤講師と塾の講師をかけもちしながら、制作を続けていました。四年前にようやく京都先端科学大学附属中学校高等学校の教員になりました」。

そうしたなか、二十代で入選、三十代で特選と着実に実績を重ねた。特選については、二〇〇九年にはオランウータンを描いた作品で、また二〇一二年にはライオンを描いた作品で二度、受賞した。後者の作品は自分が勤務する高校に寄贈した。

制作は平日の夜と休みの日が中心で、夏・冬の長期休暇はフル活用するという。日展、日春展に主に出品しているが、加えて「現在日本画研究会」なる若手・中堅の作家のグループを二〇一五年に自ら立ち上げた。特定の会派だけでない横のつながりを、自分のスタンスとしてもっておきたいと考えたからだ。日展、創画会、院展という主要三団体から十一名のメンバーがそろいスタートした。今では二十名ほどに増えたメンバーには三団体以外の作家も含まれる。数年ごとに展覧会を東京と京都で行うこととし、第一回は、二〇一六年に行い盛況となった。第二回は、二〇二二年春に予定されている。展覧会では、五メートルの壁面にメンバーが一人ずつ大作を発表する。その他、小品の個展も随時行っている。「作家は自由人なのでまとめるのはたいへんですが、いろいろ刺激になりますね」。

「雷鳴」2020年
改組 新 第7回 日展

「豹憑」2016年

転機となったザンビア体験

この間、米田さんの作風に大きな転機が訪れる。二〇一七、一八年と二年続けて、アフリカ・ザンビアを訪れ、リアルな自然や野生の動物に肉薄する経験をしたことがきっかけとなった。ハイエナや藪犬など野生のけものの肉付きはいかにもたくましい。車道を当たり前に歩く象、カバ、サイなどの群れが主役の世界である。観察には常に生死の危険が伴った。

最初の年は、友人の誘いで、十人のグループで十日間のツアーに参加した。たまたま日・ザンビア友好協会の幹部の方も同行されたが、その人からもっと野生の世界をみるべきだと勧められ、サファリやビクトリア・フォールズを訪ねた。おなじく日本画を描く友人とは、スケッチブック片手に車で動きまわり、気に入った所で止まっては写生をした。高校の教員をしていることもあり、現地の学校も見学させてもらったりもした。

二年目は、単独で各地に足を延ばし本格的な取材をおこなった。ザンビアで二番目に大きいというサファリには衝撃を受けた。演出の一切ない、食うか食われるかの乾いた世界…。ハイエナも鹿もエサをもらって生きているわけではない。日本の動物園ではおっとりした象も本来はけものである。象の親子を撮影しようとしたときのこと。二十メートルほどの距離からじりじりと接近し、五メートルほどに迫ったとき、親の象がにわかに自分に突進してきた。無我夢中で逃げたが、途中で転んだ。気づけば、何かの植物の大きなとげが靴底を貫いていた。一瞬、死を覚悟した。またジープからの写生中、こちらの物音に対し、今にも襲いかかろうとするライオンの眼光があまりにおどろおどろしかったのは忘れがたい。

こうしたザンビアでの生の体験が自分の心に深く刻まれ、その後の制作に反映されるようになった。帰国後、ある動物園にハイエナを見に行ったが、現地で見たハイエナとは体つきも目つきもまるで違ったという。

ちなみにこのとき、前年に見学した現地の学校を再訪し、美術の授業を受け持つという経験もできた。勤務している日本の学校から、現地の学校との交流を深めてきてほしいとの要請があったためだ。授業では、墨を使ったり鉛筆でヘアデザインを描いたりした。日本の鉛筆を貸してあげると書きやすいということで、子どもたちが競い合うように集まった。その学校では黒板も机もガタガタだったという。こうした縁がきっかけとなり、二〇一九年には、ザンビアの生徒十数名を日本に招聘し、来校を実現することもできた。

「猩々」2009年 第41回 日展

米田さんの美術の授業には「グローバル化のなかの芸術」を意識した内容も多い。昨年は中学の授業で、世界各国の伝統模様を各自が調べて三角形のパネルに描き、それを一九六か国分並べて大三角形にするという大作を完成させた。

箔を焼く魅力、そして白へのこだわり

米田さんの作品にはさまざまな斬新な技法が使われている。たとえば、今春制作した「けものみち」という二連パネルの作品は銀箔をベースとしている。ふつう、動物を描くときは体毛を細かく描くが、この作品では銀を腐食させ酸化させているのみ。背景も絵具ではなく腐食剤で樹を描き、その上に白い胡粉などをかけてつぶしている。ところどころ茶色く見えるのは銀箔を酸化させて焦がしているからだ。まんなかの木の幹はさらに黒っぽく焦がした。そうした変化をつけて、最終的には幹以外のところを真っ白にした。この作品はザンビアで車がパンクし、修理を待っている間に写生した木を象徴的に描いたものだ。「アフリカといえば、熱帯のカラフルなイメージがありますが、絵にするときは、日本画的な感性というか、白色の出方を大事にしました。その際、金属を腐食させる技法、とくに銀箔を焼いてみたことで面白い仕上がりになったと思います」。こうした技法の工夫は、作風にも変化をもたらすようになったという。「今までは迫力一辺倒、画面からエネルギーがみなぎるような作品が多かったのですが、最近は少しずつ、静かだけれど力強い生命といったものを表現したくなってきています」。

「けものみち」
2021年［部分］

前述のとおり、米田さんの作風の変化は、ザンビア体験によるところが大きい。動物園で見ていた時は動物しか見ていなかったが現地に行ってからは背景の大自然を意識するようになった。そうした目で動物を表現したい。

「作品にするまでの過程すべてが大事だと思っています。写生をしてから、それをあたためている時間であったり、その後、下図から完成までにかける時間だったり。時間をかけて少しずつ作業を積み重ねていくのが自分のスタイルですね。手間暇をかけて描いた作品にはやはり粘りがあります。すぐにはものにならないので、二、三年あたため、年に一作品ほど、いちばん自分の力を注げるようなテーマで描けたらと思います。今年はこれまで使わなかった技法を試したり、さらに自然と向き合ったりしてみたいですね」。

昨年二〇二〇年の日展作品は、ザンビアで遭遇したバッファローが主題だ。ビクトリア・フォールズでの地響きと雷鳴がうずまくなかで水煙が巻き上がり頭上から降ってくる経験と、砂ぼこりを巻き上げ大地を駆る水牛とを結びつけて描いた。アフリカの太古のアフリカの壁画へのオマージュの意味も込めた作品でもある。「アフリカでの体験を通じて、自然の猛々しさと恐ろしさを肌で感じ、自分の五感が大いに刺激されました。今後もそういうものを作品にしてみたいなと思います。同時に、作品にするときには、写生そのままではなく、自分なりの色を出せるよう探っていきたいです。とくに白色にこだわりたい。どのように印象深い白色を出すかが課題です。白は中途半端だと汚く見える。白がきれいに見えるような引き立てる色が必要ですね。同時に白が周りの色をもきれいに見せてくれることに気づいたりもしたので、そうした相乗効果の可能性を深めていきたいです」。

こうした試行錯誤のなかで思い出すのが、感性をデザイン化するという父親の仕事だった。「今まではデザイン化というのが自分のなかでタブーだったんです。でも、オランウータンの絵を描いてから吹っ切れて何をしてもいいんだと思うようになりました。これからはいろいろな技法を合わせるなど、新しいことにも挑戦しながら表現の幅を広げていきたいと思っています。そこで自分なりの自然観や世界観を作り上げることで、見る人が何かを感じてくださるというのが一番の理想です」。

作品に表われるその時々の想い

これまでさまざまな動物を描いてきた米田さんだが、最近、自分の作品がその時その時の自画像のような意味をもつことに気づいたという。「はじめて特選をいただいたオランウータンの作品は、ちょうど父親が亡くなったころに制作したものでした。これはじつは亡き父を描いていたのかもしれません。いまハイエナを描いているんですが、これにもなにか意味があるんじゃないか。無意識にそのときどきの心境にあった動物を選んでいるのだと思います。いずれにせよ、自らの精神性を日本画独自のデザイン性や装飾性を通じていかに表現していくかが肝心です。まだまだ道半ば、これからさらに頑張らなければと思っています。」

日展などの大作を制作すると同時に、「現在日本画研究会」を率い、学校では後進の指導に忙しい。そのなかで米田さんは、静かだけれど力強い生命の躍動を描くためにこれからさらに表現の幅を広げていこうとしている。

洋画

福井欧夏

洋画家
日展会員

高田馬場駅から私鉄で三十分ほど、花小金井駅から続く桜の並木道を進むと公園の前の角地に画家のアトリエはあった。急な階段を上がった二階で二部屋の間仕切りをとって、天井の板もはずし、むき出しの梁を生かした、高さ三・七メートルの独特の空間である。いつもモデルが位置する向こう側には、まるで舞台のように、美しいレースの衣装がトルソーに横向きに着せられている。画家が毎日を過ごす空間だ。

Profile
Ouka Fukui

1968年、広島県生まれ。93年、多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。95年、武蔵野美術大学大学院油絵科修了。第71回白日会展初出品　白日賞受賞。2000年、初個展。03年、日展初出品。06年、第38回日展　特選受賞。10年、第42回日展　特選受賞。20年、第96回白日会展文部科学大臣賞受賞。

母の助言で美術の世界へ

福井欧夏さんは広島に生まれた。その名には由来がある。ご両親が欧州旅行後の夏生まれで、文豪井上靖さんの命名だそうである。祖母の姉が井上靖夫人で、親せきであり、幼い頃には正月に毎年会っていたという。三歳で所沢に移り、その地で育った。結婚後、九年前には小平に移り住んだ。改築し天井を高くしたのは、自分の目線の高さを変えずに百号の大作を描くため。光がふんだんに入る理想的な環境である。

そんな、洋画家福井さんの経歴は異色である。多摩美術大学のグラフィックデザイン科出身だ。そもそも高校時代は陸上部で、高校三年の一月まで長距離を走っていた。日曜画家だった母親から、「几帳面な仕事や絵が好きなんだから美大受験の予備校に行ったら」と勧められたのがきっかけで、受験の一か月前に予備校の初心者コースに入った。デッサンも初めてで、講師からは「君はじゃあ学科ができるんですね」と嫌味を言われたほど。しかし陸上部で培った負けず嫌いな性格で奮起した。小学校から美術の成績はずっと良く、絵画やポスターコンクールなどで賞をもらう、クラスにひとりふたりいる絵が上手な生徒だったと振り返る。でも予備校にはそういう人しかいない。グラフィックデザインの道をめざし二浪し、多摩美術大学に入学することになった。

予備校時代の講師に導かれ油絵を

大学入学と同時に予備校から声がかかり、今度は講師を始めた。元々は自分が生徒の時のクラス担任であり、講師になったのを機に親しくなった武蔵野美術大学の油絵科卒の恩師がいて、その人が福井さんの人生を変えることになる。三澤寛志氏である。アトリエの壁には師の人物画作品が掲げられている（写真中央の細長い作品）。大学二年のある日、「個展があるから額を組む手伝いをしに来てくれないか」と言われ初めてアトリエに行って実際の作品を見て衝撃を受けた。人物画の数々。こんな絵を描ける人がいる。自分もやってみたいという衝動にかられた。師の薦めもあり、翌日には一緒に画材を買いに行っていた。「三澤さんは僕から言わせれば日本のダ・ビンチみたいな方で立体でも何でもでき、絵に対する姿勢やものの捉え方などいろいろなことを教わりました」。描き方は徹底した現場主義、目の前にモデルを毎回呼んで

描くスタイルで、当時は新制作展に出品していて、床や壁、部屋にある小物や風景など見ないでも想像で描ける優れた観察眼の持ち主だった。百五十号の作品も年に二枚描いていた。それはただ美しければいいという写真写実ではなくて、髪の毛のほつれやちりちりもみな描いていた。人体解剖学も得意で五、六冊教本を出している。この人に憧れ、最初はまね事で油絵を描き始め、卒業制作には油絵の大作を出して百六十人中、成績は一番に。しかし、グラフィックデザイン科の学生が油絵を出しても決して表には出ず、卒業と同時にその作品をムサビの油絵の大学院受験に持ち込んだ。三澤さんはムサビの大学院の修了制作で優秀賞を受賞していたから自分もと思ったのだ。九人中六番で合格したが油絵出身でないため四面楚歌を感じた。しかし、デッサン力をみせて、常にアトリエで夢中になって描く日々を過ごした。

本当に悩んだ人に聞こえてくる師のことば

ムサビでの恩師が独立の松樹路人先生である。入って最初に衝撃的なことを言われた。廊下に呼び出されて、いきなり『君の絵はモデルさんを見なくても描けるよ。君はモデルがいるときにモデルしか描かないだろ。せっかく来ているから背景は描かない。そうじゃなくて、たとえば指一本、指なんかほとんど描かなくても周りをきっちり描くことで、これがもう存在として成り立つんだ』と。それから二年間はそのことに徹底し、おかずいらずでいられた。写実コースには捉え方が真逆の男性がいて、『お前とたして二で割ったら一人前だ』とも言われて、日々彼の描き方を注視した。すごく勉強になったし、いただいた言葉の意味が途中からわかり徹底すると、絵がグッと良くなったのが自分でもはっきりとわかったという。

修了時には、トップで優秀賞を受賞。今度はその修了制作を、松樹先生を通し白日会に持ち込んだところ、初出品で白日賞と会友推挙という栄誉を得た。そこからが大変な道のりだった。以前より良い作品を描こうと意気込んでいたが、いざ会場で自分の作品を見て愕然とした。恥ずかしさから初日に懇親会に出ずそのまま帰ったことも二度ほどあった。「でも悔しいから後日また行って、会場で良く見える作品の色調や

「うたかたの森で」2020年
第96回 白日会展 文部科学大臣賞

「暁のほし」2013年 第45回 日展

構成、どうして自分の作品がアトリエで見るのと違うのかを研究しました。二、三年そういうことを繰り返し描いていたら返り咲いてきた。これを逃してはいけないと思い、そのときが一番一生懸命で、公募展の意味や大事さもわかり、本当の意味で力を養った。とにかく精一杯描くしかないと感じたという。

白日会会長の中山先生は個展会場に毎回丁寧に観に来てくださった。先生ももちろん現場主義でモデルさんを目の前にして描かれていた。「『福井君は年間何枚くらい描いているの?』と尋ねられ、『仕事しながらですので年六枚くらいです』と答えると『少ないねえ』と。僕は当たり前のように『写真を全く使わないでモデルさんを目の前にして二人三脚で描いていますのでモデルさんと僕の都合で』と答えたら、現場主義ということに驚いてとても喜んでくださったんです」。

日展の初出品は二〇〇三年。最初に誘いただいたときは、気が進まなかった。まだ三十五歳で何かしようと思っていて日展には観客動員数が多いし地方巡回作品に選ばれれば作品が全国を回る。特選まで四年かかった。その後二回目の特選まではかなり苦しむことになった。先生曰く一回目の特選のほうが良かったと。他の先輩方からは、「期待されている、もっと力をつけろ」と励まされた。ようやく四年後に、受賞の通知をいただいたが、先生からは「今回もまだまだやり直す余地はある。『もっと苦しめ』と言われました。とにかくもっと苦しめ」と言われました。とにかくそうやって力をつけさせていただきました」。作品が地方巡回をすると初めて自分のHPのアクセス数が大きく伸び、日展の苦しみはある。「ただ、観に来てくださった方の気持ちを裏切りたくない」という思いが強い。

この人物画では、最初はその人そのものを描こうと思った。そのためか「肖像画になってしまっている。女性像にならないと万人に好まれない」と先輩に言われた。作品にはアクがあり、ほかの人がその絵を求めたいと思えないバリアがあることに気づいた。巨匠の方々の絵はモデルが誰かが気にならない。美しく女性の奥ゆかしさがある。「だから僕は伝え方を知らなかったんだなと思いました」。こうして悩みに悩んだ末にいただいた貴重な言葉は身になって画面に変化となって現れる。そうした言葉をとても大事に思っているという。

モデルは友達の紹介や同業者に声をかけたり、予備校の卒業生、美大生など。お互いに相手の性格がわかっていてリラックスできる方にお願いした。外見だけきれいな人を呼んでもその人がわからないと絵にならない。男性や静物も興味があれば描く。かつてボクシングジムに通っており、そこで知り合ったボクサーにほれ込んで描いたこともある。

衣装は自分で探す。アトリエには立派な総レースの衣装がトルソーにかけてあった。「あれだけは画廊のオーナーがベネチアまで行って仕立てたもので、かなり高額なものなんです。アートフェア東京に三美神を描いてほしいと言われ買ってきてくださって、それから使わせてもらっているんです」。その衣装で白日会の文部科学大臣賞受賞作など数点を描いた。ふだんはアメリカの現代の古着を入手することが多い。衣装を見たときにぱっとイメージが広がり、モデルと背景までが二、三枚浮かぶこともある。また、頭の中に出てきたイメージに近づけて衣装を選ぶこともあり、ずっと描いているオフィーリアやハムレットに付随するものだったり、組みながら世界観を作り上げていったりもする。

「いつか見た空へ」2016年 第92回 白日会展

見る写実ではなく感じる写実を

「今後はレースの衣装で群像をやってみようかなと考えています」。髪の毛一本一本や、どこまで見えたかに興味はない。ヨーロッパの巨匠で、近寄ると筆跡が見えて、二三歩下がるとピントが合うベラスケスの作品など、それこそが絵画だなと思う。思わず絵の前に立ってぼーっと見ていろんなことを思い描く、奥行きがあるとはそういうことだから表面の技術ばかりに目がいって、歌詞が聞こえてこない音楽みたいになりたくないと語る。絵からいろいろな人がいろいろな感じ方をする。たとえば笑っているようにも怒っているようにも見える。ただ普通に座っている作品なのに特別に見えてくる。絵を見てその人に出逢ったときに感じるリアリティ。だからアクロバティックなことをしている絵で注目を集めるのではない。内面性があってこそ絵であり、それが画家のマジックで、それを極めていきたい。公募展となるとどうしても他の人より目立たなくてはとなりがちだが、その軸がブレてはいけない。「人の存在としての強さ、絵がより深くなっていけばいいなと思います。とにかく感じる絵を、見る写実ではなくて感じる写実を僕はずっと求めています」

風景イメージを投影し、没頭して描く

さらに独特の描き方がある。「僕の絵は普通に肖像画的に描いたとしても、たとえば人物がいるその場が霧の中や雪が降る、あるいは雨が降る直前、雨上がりなど、画面には直接描かれない風景イメージを投影して描くことが多いんです。そうするとそれを伝えようと気持ちが高まる。そこから絵の中の登場人物はどういう感情でその場所にいて機嫌が悪いのか物思いにふけっているのか光が差し始めたから少し気分が明るくなり始めたのか、頭に浮かんだ風景イメージをネットで探しアトリエに写真を貼るのは出産直前の妊婦の妻を描いたときはその頃の資料や、病室でやり取りしたメールなどを貼り、経験や記憶などいろんなものを画面に注ぎこんだ。だから単なる肖像画でない独自のものになる。そこに出会ったような空気感や、存在としてのリアリティ、感じるという意味でのリアリティを追求する。オフィーリアを描いていたときは、敷いてあるグリーンの布の皺をずっと見ていると波や波紋に見えてきて、幼い頃にどこかで見た風景が甦り、そういったスイッチが入ると、気が付けば八時間ほど立ちっぱなしで描き続けていることがよくあった。そのくらい陶酔して描き、自問自答しながら作品に込めていく。タイトルが最初に決まると制作は七割できてしまうとも。描いている間そのイメージに没頭できるからだ。昨年、白日会の文部科学大臣賞受賞作は背景は全部想像で描いた。蓮池や柳のような葉と隙間だけで森を表現したのだ。

一番好きな作家はウイリアム・ブグロー。大学院の時に初めて横浜美術館で本物に出会った。ジョン・ウイリアム・ウォーターハウス、ミレーからも影響を受けた。「今の時代にそういう作風は好きか嫌いかがあり、物語性を出したいがゆえの工夫に違和感を唱える人もいます」。しかしそれが逆にエネルギーになる。だからこそ、好きなら好きなものを描いて認めてもらえるところまでもっていけるかどうかが作家の力だと語る。古典的でドラマチックな物語を主張するタイプの作品はそれまでなかったが、徐々に描く後輩も増えてきた。「悪影響かな。頑張らないといけないな」と笑う。確固とした画家の思いを感じた。

彫刻

秋田 美鈴

彫刻家
日展会友

岡山県倉敷市に生まれ育ち、地元の岡山大学へ進み、そこで彫塑と出合い、良き師と出会い人生が変わった。水を得た魚のように、柔軟に制作に打ち込み、次々と彫刻団体各賞や二度の日展特選を受賞。その才能を伸ばしてきている。制作現場に伺い、お話をうかがった。岡山市郊外の緑の田園が広がる中、かつては養鶏場を営んでいた祖父母の家の納屋を明るいアトリエにして、こちらに通っているという。アトリエの横には小さな公園があり、子どもの頃遊んだというブランコが揺れていた。

Profile
Misuzu Akita

1992年、岡山県倉敷市生まれ。2014年、岡山大学教育学部学校教育教員養成課程卒業。第44回日本彫刻会展覧会 新人賞。15年、第45回日本彫刻会展覧会 新人賞。改組新日展第2回展より毎年出品。16年、岡山大学大学院教育学研究科修了。第46回日本彫刻会展覧会 新人賞。18年、第48回日本彫刻会展覧会 優秀賞。改組新第5回日展 特選。19年、岡山芸術文化賞 準グランプリ。第16回マルセン賞 文化賞。20年、改組新第7回日展 特選。現在、日展会友、日本彫刻会会員。

大学二年で粘土を触って「これだ」と直感

岡山・倉敷に生まれてその地で育った。秋田さんは昔から美術や図画工作は好きだったが、大人になってからもずっと続けるとは夢にも思っていなかった。子どもの頃は、パタンナーをしている母親が洋服を作ってくれることが自慢で、自分の手で自分好みのものを作り出せることへの憧れが今に繋がっているようにも感じるという。

岡山大学教育学部の美術教育講座に進んだ。しかしそこを目指していたのではなく、意外にも最初は経済学部を受験しようと思っていた。ただ、それもなんとなくだったので、受験勉強にも身が入らず、センター試験は玉砕。そこで、担任教諭が美術教諭と相談し、「教育学部があるけれど、そこの美術を受験してはどうか」と紹介してくれた。美術は好きであったが、進路にするのは一握りの才能のある人で、自分はそうではないと思っていた。「教員志望でもなく、美術の道に進むということはそれで食べていく人になるということで、自分にはそんな生き方は許されないし、できないと思っていました。今の私は制作の傍ら生活の糧に仕事もしていますが、高校生のときに将来自分がこうしていると知ったら意外すぎるでしょうね」と笑う。高校時代はとにかく日々をやり過ごすのに精いっぱいだったと振り返る。優等生で、課題はこなすが、プラスアルファのモチベーションがない。とにかくそのときは自宅から通える岡山大で入れるところに入りたかった。

大学に入学し一、二年は広くいろいろなことを経験、三年からゼミで専門的に学ぶ。とりあえず入ったはいいけれど、本来やりたかったこととも思っていなかったので、しばらくはぼんやり過ごしていた。しかし、二年の後半に突然転機が訪れる。頭像をつくる授業で本格的に彫刻に触れて、そこでびびっときたのだ。「それまでボーっと生きていたのですが、そこで、変わった。ようやく目が覚めた感じでした」。ちょうどゼミを決める前で、これからについて考えるくっけれいるりまし

「星にねがいを」2018年
改組 新 第5回 日展 特選

後期の授業のときだった。自刻像をつた。「うまくできたわけではなかったど、粘土に触れた感じが自分に合って、『これだ』という不思議な直感がありました。そこからですね」。

年になって専門に分かれ、芸術院会員田二郎先生の教え子である、恩師上田先生に指導を受けるようになった。自研究する時間も増えた。のめりこんでを本格的にやっていく中で、自分の作客観的に評価される場に出してみたい、公募展に出し始めたのは三年から。県展、日彫展に出して、次は日展と進。日展には大学院の二十二歳のときに出品し、みごと入選した。

学中に日展に入選することは一つの目した。また、上田先生が出されているあったし、美術の世界にあまり触れて人間だったので、どういうところかないままに自然の流れで出すようになした。ただ、初入選のときはドキドキ会場に行ったものの、会場で見た自分品にがっかりして帰ってきた記憶しかません」。

現在二十九歳、家族はどんなふうに思いるのだろうか。

さい頃は泥だんごづくりに夢中になったから、それが原体験としてあるのでなんて言われたりします。確かに土のや自分の手の中で形づくられていく感好きです。そうは言っても、現状は家族にとっても意外なものだったと思います。元々の気質としてひとつのことを掘り下げてやっていくタイプでしたが、思春期になったら自分が夢中になれるものがなくて。いろいろなことを知っていく過程で、これというものを見つけることができなかった。その後、偶然が重なって今に至ります。今は迷いなくやっていこうと思っています」。

偶然生まれる良い形を拾っていく

二〇一八年、二〇二〇年と二回の特選を受賞した。

「特選は、最初のときはびっくりしたのですが、作品はあまり気に入っていないのです」。常に自作に厳しい眼を向けている。翌年、またその次の年と作品のイメージが変わっていく。

「前の作品とは違うことをやってみたいと思っていますし、制作中にもどんどん変化していきます」。

制作過程は、最初から構想を固め過ぎず、いつも見切り発車で制作に取り掛かるという。「最初に芯棒を組むときも、こういうポーズは以前やったから今度はこうしてみようとか。モデリング中もどんどん芯棒を動かしてやっていきます」。途中で、今回は坐像の気分でないなと思ったら、粘土を取って芯棒から組み替えたりして、何度もやり直しながらその時々の自分の感覚にしっくりくる形を探していく。

「まにまに」2019年
改組 新 第6回 日展 無鑑査

「自分のやり方として、粘土を思い通りに動かしすぎないようにします。というか、そもそも思い通りの『思い』が粘土を触っているとどんどん変わっていきますし、粘土が偶然みせる形が面白い。自分の意思と、無意識や自然の作用との境界が曖昧というか、自分の中にあるものだけではなくて、偶然生まれる良い形を拾っていくんです。その方法が、自分が思っていた以上に良くなると気が付きました。二〇一九年の作品名である『まにまに』という言葉は『…に任せて、…のままに』という意味。足の恰好がこうなら、腕はこう動いて、頭の角度はこうなる、というふうにすべてが繋がっていて、だんだんと必然の形が見えてきます」。

作品自体は全部自分ひとりでつくる。たまに制作している期間に用事で先生のアトリエに伺って、先生が常日頃思っていることを聴いたりすると気持ちが変わってくる。「作品についての具体的なアドバイスはあまりありませんが、お話を聴くと、先生の考え方が自分の中に生きてくる感じがします。先生に師事する前と後は違いました。先生は日常にあるほんのささいなことや素朴なものに感動をされていて、そういうところにすごく惹かれました」。

心のゆとりで心が動く

「高校生のときは、すべてを頭で理解しようとしすぎていて、いつもいっぱいいっぱいな状態でした。周りに目を向けたり、自分のことについて考えたりする余裕がありませんでした。大学で先生のお話を聴いていたら、先生は心にゆとりがある、そういうところに共感していきました。感動するには、心が動くためのゆとりが必要で、心のゆとりがあるからこそ心が動くんだということがわかりました」。

今はやりたいことが一本あるので、それを基準に生活のことも考えられる。やりたいことが決まっていれば、余分なものが見えてくるので、それを手放していく。勝手に自分を縛っていたことに気が付いて、そこから楽になれたと振り返る。

「先生は、すごく期待してくださっているのがわかります。先生は私だけでなく教え子に対して純粋に平等に期待している。自分以上に期待して信じてくださるから、自分も頑張れていると思います」。

学部のときは常に彫刻室にいて、先生の指導を受けた。院生の夏くらいからこのアトリエでひとりで制作をしている。作業台は先生と一緒に大学で作ってここに運んだ。大体のものは自分で作れることがわかり、その後、アトリエの棚も作ったという。

現在は、「仕事の日は帰ったら食事をして就寝。休みに集中してやります。週二日制作ができるとして、粘土に二カ月弱で石膏取りから修正・完成まで一カ月、計三か月弱が目安です」。

乾漆技法を使って

秋田さんが現在取り組んでいる乾漆技法について尋ねた。

「私が用いている乾漆の技法は、石膏やFRPで造像するのと、粘土原型から石膏で型を取る工程までは同じです。型の内側に石膏を流せば石膏の像、漆を塗っていくと乾漆の像ができます。乾漆は上田先生に学生のときに教えていただいて、小品をちょこちょこつくっていましたが、二回目の特選のときは、大作でやってみたいと思い、初めて等身大にチャレンジしました」。

まず、水で練った砥の粉とチューブから出した生漆を混ぜて「錆び漆」をつくる。それを、離型剤を塗布した石膏型に塗り、

麻布で補強し厚みを出していく。分割した型を繋ぎ合わせた後、漆が十分に固まったら、外側の型を外して乾漆像を取り出す。そこからさらに、部分的に錆び漆をつけては固まるのを待ち、やすりをかけてを繰り返し、密度を上げていく。漆は分量や湿度など条件の違いによって敏感に変化するため、手をかけるうちに表面には色むらができるが、それもまた作品の魅力になる。

「私の場合は表面につやを出した作品が多いですが、漆は他にも幅広い表情が出せるので、追究しがいのあるおもしろい素材だと思います。石膏はよく使われるベーシックな素材ですが、粘土原型を石膏に転換すると、形がぬるくなる感じがします。どうしても粘土のときの方が良かったとなりがちで、直付けでなんとか立て直すのですが、なかなか扱いが難しい。一方、漆は、素材自体に相当の魅力があるので、粘土の段階よりも良くなるということが期待できます。また、漆の粘り気のある素材感が、自分の形態感覚と作品上でうまくマッチするように感じます。ただ、素材の魅力に頼っていないかという反省はいつもしています」。

乾漆をしている人は日展でも数人とのことだ。上田先生も独学で、惜しみなく研究成果を教えてくださった。最近は、個人的に他の乾漆の先生からもお話を伺って、それを組み合わせている。奈良・興福寺の阿修羅像も乾漆技法とのことである。

また、基本的にモデルは使わないという。

「在学中、裸婦のモデルさんを呼んでクロッキーをすることはあっても、制作中はいつもモデル無しでした。友人にモデルを頼んで制作したこともありましたが、形になるのはたしかに速い。でも、現実の形にひっぱられがちで。できているかは別として、形を写すのではなくて、造形に自分の解釈を主張しないといけない。人体の構造把握もまだ甘いですし、頭の中で像を結ぶのが苦手なところがあるので、一発で形が決まらなくて、実際に粘土を取ったり付けたりする試行錯誤が必要です。決まってないこと、できないこと、そういう余白の部分に案外ポジティブな可能性がつまっている気がします。タイトルも大抵つくりながら考えたり。今年の作品は、今のところ寝転がっている感じで。まだ粗付けですかね」。

今後について尋ねると、「あまりビジョンがないんです。行きあたりばったりで、その時々にやりたいと思ったことに誠実に取り組んでいき、自分が納得できていることが大事。目標を決めてやると、そうにしかなれない、それではつまらない気がして。制作と同じですね。そういう生き方なのかな」と笑う。あまり突き詰めないやり方だ。自由にいろんなものや人に出会ってその都度自由に変えていく。秋田さんはどこまでも柔軟な姿勢だ。肩の力を抜いて、今後も進んでいくのだろう。次の作品への期待が膨らむ。

「臥ゆ」2020年 改組 新 第7回 日展 特選

村田好謙

漆芸家
日展会員

京都、山科の川沿いに村田好謙さんの漆工房がある。二階のアトリエに上ると、聞こえてくるのは金華鳥の鳴き声、鳥籠が三つ並び、水槽には熱帯魚。あちこちに作品が置かれた広い工房には大きな窓から光が入り、緑も置かれている。奥には、漆を乾燥させる室がある。傍らではお弟子さんが懸命に丹念な作業をされている。村田さんは、ネクタイ代わりと言われる縦に漆のぼたんが並んだシャツにジーンズで、終始朗らかに応じてくださった。

「風と光と水と」
2019年 改組 新 第6回 日展 日展会員賞

Profile
Kouken Murata

1956年、京都生まれ。1975年、京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸過程漆芸科卒業。漆工奨学賞受賞。漆芸作家服部峻昇氏に師事。1976年、日展初入選。1977年、日本画専門学校四年間在籍。1986年、全関西展　関展賞一席受賞。2000年、京都市芸術新人賞受賞。2007年、日展特選受賞。2009年、日展特選受賞。2011年、日工会展内閣総理大臣賞受賞。2015年、日展審査員。2016年、京都府文化賞功労賞受賞。2019年、日展会員賞受賞。2020年、日展審査員。2021年、日工会展文部科学大臣賞受賞。現在、好謙漆工房主催、日展会員、日工会理事、京都府工芸美術作家協会理事、全関西展運営委員、京都国際交流総合展相談役、創工会会員、京都精華大学講師。

五条坂に生まれ、日吉ヶ丘高校へ

京都、五条坂の陶芸の町に生まれた村田さん。父親は元々陶芸を、祖父や叔父は漆塗の仕事をしていたが後に父は塗師屋に転向したという。小学校二、三年の頃、五条坂から火が消え、薪でたく窯が使えなくなった。同じ頃、京都の百貨店で横長の大きな絵画に感動し、その前で動けなくなるという体験をした。草原に夕日が映る作品だった。多感な子供時代、近所では美高生がキャンバスを広げて絵を描いている姿をよく見かけ、そうした環境の中、作家になりたいという思いを何となく抱いていた。その後、伝統と歴史のある美術系の日吉ヶ丘高校の漆コースへ進む。「自由な形造りから装飾の幅も広く色んな事ができそうで面白そうと思い、そこに入学して、はまりにはまりました」。クラスは定員十名で家庭的な雰囲気だった。展覧会前は夜十二時を回っても作業をしている事があった。「二人の先生がものすごく熱心で、その熱意と作業性の面白さが伝わって、ずっとやっていきたいなと思いました。やっぱり学校や先生との出会いは大きいですね」。二年の終了時、進路を決める時には二人の恩師に囲まれて、「この学校からプロを目指してほしい。先輩に弟子入りして早く技術を身に着けた方が良い」と薦められた。

高校二年で漆芸家を志し、卒業後は工房へ

弟子入りと言われても、相撲取りや落語家のイメージしか沸かなかった。まだ上の学校もあるし親は反対すると思っていたら、「自分の人生だから自分で決めなあかん。その代わり自分で決めたら後戻りできんからな」と、全く反対されなかった。決意を先生に伝えると、「もう決めたんか」と言われ、弟子入り先は両先生にお任せした。後に師匠となる服部峻昇先生も学校の先輩で、三年の夏には恩師と共に挨拶に伺ったのが初めての出会いだった。十四歳程上で後に日展の理事まで務められ、華やかで煌めきのある美しい独自の漆の世界を展開されていた。

学校は興味を持つ何かの出会いのために行くものだと村田さんは語る。当時は「高く遠くへ飛ぶためには、長くて早い助走が必要」と言われていた。漆芸作家として独立するには何が必要かを逆算して考えた。高校二年の時に自分で決めたのだ。「人生その先はわからないにしても、好きで選んだ道。そこが一番大事かと思います」。

卒業制作の課題二点を早々に仕上げ、夜な夜な学校に残って、消灯の後も蝋燭の灯りで黙々と作業を続けた。卒業後は師匠の工房へはバイクで通い、昼休みや休憩時間にはスケッチをし、夜は日本画の専門学校へ通った。「プロになる」という強い意識を持っていた。

公募展には十九歳から出し始めた。しかし弟子入りして半年後、師匠がヨーロッパへ一年間国費留学される事になり、出発の前に「三年間は公募展には出品するな」と言われた。「わかりました」とは言ったものの、我慢できず直ぐに作品制作を始めた。京都府工芸美術展や京展に出品し、次に日本で一番大きな日展に挑戦したいと思い、思い切って応募してみた。入選はしたものの師匠に言われたことが心配だった。その後帰国した師匠に呼び出されたが「『行く前に何を言ったか覚えてるか。通ったんか、しゃあないなぁ』とあたたかく微笑んでおられました」。

しかし、食べるための修行は厳しかった。下仕事で血がにじむくらい貝を切る作業があり、数カ月後やっと筆を持たせていただいた。漆塗りのトレーに見本の柳の絵を渡され、同じに描くよう言われたが、同じでは面白くないと勝手に思い、風の向きで変わる様々な柳を描いたところ、無茶苦茶怒られたのだ。引き出物として同じ絵を百枚程描かなければいけなかった。「振り返れば、ゾッとする事も多々ありましたが全ての経験に意味がありました」。反復練習は面白くないが、続けていくと全くできなかった事がある日突然できるようになる、そうなるとできなかった自分には戻らない。それが身につくという事で、一度その経験を実感すると、次も努力すれば必ずできると前向きに思えるようになるという。

日展初入選当時

「その後、年を重ね三人の先輩も独立され、私の後輩は七人程いました」。兄弟子が下の弟子を順番に教えていくという徒弟制度である。やがて二十七歳で工房を出て独立した。

二十代での出会い「初心不可忘」

さて、二十歳で日展に初入選した作品には後日談がある。東京の日展会場で作品をご覧になった方から売って欲しいと言う電話があったのだ。その時は何も考えず「売る気はないです」と答えていた。その後、その方から依頼を受けられたという金沢美術工芸大学名誉教授で漆芸の大家である小松芳光先生に呼び出され、京都駅前のタワービル内の一室で「作品は独り歩きする

工芸 ― 村田好謙

「命の煌めき」2021年

「天光礼讃」2020年 改組 新 第7回 日展

ものだ」と作家としての心得と作品についてこんこんと教えをいただいた。後日、雪の中、買って下さる方の金沢の会社まで作品を届けに行った。その折の小松先生とコレクターとの出会いが作家として生きて行く考えにおいての大きな節目となった。「今思い浮かべてもありがたく感謝の気持ちでいっぱいになります」。しかし、翌年の日展に落選してしまい、応援してくださるコレクターに心底申し訳なく思い、その時の気持ちを「初心不可忘」と書いて今でも工房の入り口の上の壁に掲げている。

また、漆芸の大家の大西忠夫先生との出会いも大きかった。個展や公募展へと積極的に作家活動を続けていた二十代、全関西展で一席をいただき、その審査員をされていた先生の香川のお宅に友人との旅行の途中に思い立って訪ねたのだ。「作家は固定したら終わりです。搬入の一週間前には必ず作品を作り上げなさい。一週間は自分で客観的に見る時間を持たなくてはいけない。それだけ余裕を持ってやりきって、気に入らなければ寸前で叩き割って世に出さないという事もある」と。身の引き締まるお話であった。材料も全部自己流で、金の塊から粉にして不揃いの金を蒔絵に使ったり、人がやっていない事に挑戦されていた。その影響もあり、三十代から村田さんの作品は新たな展開を見せる。

達成感を第一に、光や水をテーマに

弟子入り期間から駆け出しの頃は人に認められることばかりを目標にしたが、「所詮これは答えを探し求める世界。同じ作品でも良いと言う人もいれば、全然駄目と言う人もいる。要するに自分の中での達成感が目標で、人を意識するのではなく次こそもっと良い作品を創りたいという思いで制作を続けています。何が良い作品か簡単に答えが見つからない所に創作・表現の楽しさや芸術の深みがあるとも思っています。また、技法的な事においても先人の恩恵の中に生きておりますが、伝えられた技術だけでなく、オリジナルの技法を加えながら、過去に体感した感動の範囲を超えるものを創る事を目標に、誰が観てもこの人の作品だというものを創っていきたい」と語る。

三十代では精神世界にも興味を持ち、近所のお寺の早朝の坐禅会に毎月参加した。あるとき目を閉じ座禅を組んでいると、突然目の前に眩いばかりの光を浴びる体験をした。「脳科学者に聞いたら『幻覚です』と。たとえ幻覚でも目の前に現れたもの、感じたものに刺激を受け、インスピレーションを得て、創作活動に発展するので、それからしばらく座禅にはまりました」。よくバイクを飛ばして琵琶湖の砂浜で、只々座っていた。夕方のまだ明るい頃から座り始め、夜の琵琶湖に月が映ってキラキラと美しく、幻想的な世界に吸い込まれながら、やがてゆっくり夜が明けてくる。こうした自然の中に身を置く事で、自分はたまたまこの時代に生まれ小さな点のような存在で生きている。そんな事を考えながらそこに何となく表現したいテーマが見えていた。天空から降り注ぐ光や水、大自然の中の生命の尊さや祈りの世界。描く対象のモチーフの奥にある光や生命感を表現したいという思いであった。

「振り返ると、日展出品は二十歳からで四十五回となる。一回目に師匠に怒られていたら辞めていたかもしれない。その間、三度の入院生活も経験しましたが、身体が回復してくると病室でスケッチブックを取り出し作品の構想を練っていました。やりたい事があるというのはありがたいとつくづく思いましたね」。

特選受賞は三十回目の入選作品。長く感じたが、色々勉強になったと振り返る。「日展に挑戦して自分を引き出しながら、次こそもっと良い作品を創りたいと自分に言い聞かせ、これまで歩んできたつもりですが、全国からたくさんの方々の様々な作品が一同に展示される中に自分の作品が並ぶ機会があるということは大変得難いことで、すごく刺激になります。いつまで生きていけるかわかりませんし、恩師の多くも亡くなりました。それでも作品と教えは心の中に残り続けます。例えば会った事もない先人、後に琳派と呼ばれる光悦、宗達、光琳、抱一らの作品は、時代を超え、長い年月を経ても得も言われぬ情熱と魂を感じさせてくれます」。

何のために創るか 伝統的な技法の上に新なるものを

「何のために作品を創っているのか、当然何のために生きているのか。作品に向き合いながら感じるわけです。簡単に言えば創りたいから創っている。ただ何で創りたくなるのか。そこが謎ですね。結局やりたい事が見つかっただけでも半分幸せを掴んだようなものだと自分に言い聞かせて、今度はやり遂げる自分になるために努力する。努力できる対象があるのは幸せなことだと。今の時代は特に経済が先に立つけれど、精神世界は人にとってやっぱり大きいですから。芸術の世界には否定はない。作品は色んな方向から見つめられる。元々答えのない所に奥深さがあって自分の中でもそれを追求して形にしているわけで、そこに時代を超えて人から人へと繋いできた縦の糸がある。その糸で繋がった伝統的な技法や精神の上に立ちながら、作品制作を通して自己の発見、自己の完成へ向け歩んでいければと思います」。

これからますますAIの時代になって、人間の手仕事がコンピューターにとって代わられていく。だからこそ逆に手技の世界がもっと求められてくると思いたい。脳と手が直結して進めて行く手技の世界は何よりも楽しく続いて行くべきであり、また、工芸は地場産業として栄えてきたのだから、地域性の文化を大事にした上で作品制作を続けていきたいと語る。

「よく人生は出会いと言いますが、誰に出会うかによって人生が変わる。展覧会を観に来ていただいた方との新しい出会いが、人から人へと繋がっていく事も多く、大事なのは制作に対する作り手の情熱だと思います。千年の歴史をもつ古都京都で生まれ、人間主体の考えよりも自然と寄り添いながら生きてきた日本風の考えが、そこを心の拠り所にして形に変えてきた。先人の漆の仕事を見ても、本当に手技の素晴らしさを感じる。今や当たり前のように作業している蒔絵という漆の代表的な装飾技法。道具も含め、初めて考え出した人のワクワクドキドキ感は羨ましいくらいに楽しかったのではないかと想像します」。

蒔絵は漆の特質をよく生かしている。人にとって心地よい環境の中では漆は固まりにくいため、時間をかけて漆で絵を描いた所に金粉や銀粉を蒔いて付着させ、湿度を高く調整した室に入れて乾かす。その後漆で固め乾かした後、一旦漆で隠れた粉を研ぎ出す事で、蒔いた通りの粉が黄金の光を放って蘇るという。

「三十代の頃、習った技法以外で表現したいと色々やり過ぎて、前の方が良いと言われたりもしましたが自分の達成感を求めて歩んできました。一人でやっていたら気が付かない事も、会場でたくさんの作品の中で、客観的に自分の作品を見つめ直す事は、成長に繋がるので、年に一度、ホームグラウンドとして日展を選んで良かったと思います。これから先も産みの苦しみは絶えず付いて回ると思いますが、それ以上に作る喜びがあるのです」。村田さんは漆にかける思いを終始熱く語って下さった。

近藤浩乎

書家
日展会員

名古屋市内で多くの教室を持ち多忙な毎日を送られる書家の近藤浩乎さんのアトリエを訪ねた。フローリングできれいに整えられ部屋の白い壁には、尊敬する書家の漢字とかなの作品が掲げられている。また、海外の美術館の小さなマグネットも。ご主人の仕事で海外に行かれることも多かったそうである。毎日このアトリエで書を書かれる。床に大きな紙を広げ、和歌を書いてくださった。穏やかな先生の表情に、一瞬気迫が満ちて次々と美しいかな文字が仕上がっていく……。

Profile
Hiroko Kondou

1986年、第十八回 日展初入選。2009年、第四十一回 日展特選、2013年、第四十五回 日展特選。2017年、改組 新 第四回 日展 審査員。現在、日展会員。読売書法会常任理事・企画委員。日本書芸院常務理事。中部日本書道界常任顧問。玄之会理事長。

花嫁修業で再度始めた書道の魅力に

三重県に生まれ育った近藤さんは、小学校に入ると、近所の書道教室に四年生まで通っていた。五年生になると数学の塾に通うようになり、そちらが面白くなって、ずっと数学ばかり勉強するようになったという。しかし高校一年のときに会社経営をしていた父親が急に亡くなり、その後母親がどうしても会社を継がなければならなくなった。環境は一転、それで、大学は東京へ行くのも数学を学ぶのもあきらめ、名古屋大学の法学部へ入学した。しかし、法学は数学のように1＋1＝2という世界ではないことが入学してすぐわかった。当時の多くの女性がしたように花嫁修業として毎日文化センターでお茶やお花、書道などを習うことになった。そのなかで、子どもの時に習っていた書道だけが楽しくずっと続いていくことになった。

最初は翠軒流の漢字の今井矢江先生・阿部珂山先生に習った。しかし漢字にはあまり興味がもてず、「書道用品屋さんでみつけたかなの本がとても面白く、そこに出ていたかなの書を、みな臨書してしまったんです。漢字の先生ですが両先生とも良い先生で、かなを書くことについては何も言われず、いつもかなばかり書いていました」。

関戸本のかなの第一人者 宮本竹逕先生の門を叩いて

大学を卒業するとすぐに結婚したが、今度はご主人の母親が結婚後四カ月で脳梗塞で倒れた。介護が必要になり、書道ならば続けられるかなと思い、なんとなく書道を続けていたという。その後三人の子を育て、一方、義母の十八年にわたる世話をしつつの忙しい日々が続いた。

しかし、そんな生活の中だから一層書道を、なかでもかなを真剣に学びたいという気持ちが日増しに強くなった。そこで、末の子が生まれてから、思い切ってかなの先生の門戸を叩いたのだ。「学んでいた古典のなかでも関戸本古今集が好きで、その道では当時、宮本竹逕先生が第一人者と言われていました。二玄社の本の一番後ろに名前があったのを見つけ電話をかけたところ、快くそのまま入門を許していただいたんです。『臨書を持ってきてごらん』と言われ、

「一番下の子が幼稚園に入るまでの三、四年は通信で指導を受けていました。その後は子どもを連れて大阪の千里まで宮本先生のところへ通いました。そのころは書道がとても盛んで、練成会に行くと友人にも会えましたし、月に二回たくさんの方が通っていました」。

名古屋から先生のお宅まで二時間をかけて行って一時間半、自分の順番を待った。そうして恐る恐る先生の前に座ると、苦労して書いた倣書に……を打たれ「な」とだけおっしゃりニコニコ笑顔だったという。何の説明もない。十年ほどこの闘いが続いた。ツメルアケルができていなくて一本調子で原稿用紙に書いたようになっているというのが先生の……の意味とわかったのはずっと後になってからのことだったと振り返る。

また、宮本先生のところでは、当たり前のように展覧会に出すよう言われており、ほぼ最初からほとんどの展覧会に出した。「いつも自由に書かせていただき、難しいがやってみろという感じでした。大字かな運動というのを宮本先生が提唱された関係で、大字がなでいろいろな展覧会に出品される方が多かったのです」。

日展に最初に入選したのは九年目のことだった。名古屋で阿部先生のところに通っていたときから、先輩が日展に入りたいということを言われており、日展はすごいものなんだとはずっと思っていた。入門するなり宮本先生は日展にも出すよう進めてくださった。関戸本古今集の倣書をずっと続けていたが入選した十八回展のときは、義母が入院しており、細い小さい字を書く時間がとれなかったため、大きい字で書いたところ、それが入選した。「斧入れて香におどろくや冬木立」という十七文字を一枚に書いた作品である。

「その後、宮本先生が亡くなられると、その一番高弟でいらした黒野清宇先生に指導を仰ぐことになり、黒野先生の作ってみえた玄之会に入って勉強を続けました。黒野先生にはその後、十五年ほど指導を受けることになりました」。

二〇一七年に黒野先生が亡くなられてからは、近藤さんが玄之会の理事長をされている。現在はコロナの影響で教室に通う方は三分の二くらいとなり、ほかは通信の指導に代わったが、展覧会前はとても忙しくなるという。

こうして、三人の師に指導を受けたが、それぞれ特徴のある先生だった。漢字の専門の阿部先生はかなを自由に書かせてくださったり、宮本先生は細かいことはおっしゃらずだった。黒野先生の指導はダメ出しが多かった。たとえばこれは空間が響いていないとか、これでは暴れすぎているとかで具体的なことはあまり言われなかった。「具体的に教えていただいたのは、『さ』という字をきれいに描かずに右下にバランスを崩して書けば左上に動くだろうと言われ持っていくと、今度は『これだけできるなら倣書してごらんなさい』と言われて、倣書の言葉も知らず苦労したんですけれど」と語る。二十九歳のときだった。

倣書とは、まず書きたい詩歌を関戸の中の好きな字形の変体仮名を選んで字集めする。いかに組み合わせるか、上手く流れを作り、右の行にもうまく調和させることを考えて字選びをし、全体で調和のとれた作品にするためにパズルのようにして、画面を創作していく、たいへん時間のかかる創作活動だそうである。

「甘つ風」小倉百人一首

たのと、『楚』という文字を前半の上部に置くと全体の動きが出るぞと言われたくらいで、細かいことは本当に言われませんでした。心に残っているのは、特選をいただいた後は、『どんな文字を書く時も作品だと思って書くように』ということです。また、『プロというのは百回書いたら同じものを百回書かなければいけない』というお考えでした」。こうした指導を通して、近藤さんは、自分で考える力、自分で感じる力を培ったと感じている。

自分の好きな和歌を作品にする

書を書き出すと、すべてを忘れて打ち込む。日展カレンダーをつくり、日展に出し終わると次の日展に向けてという生活をずっと宮本先生の頃から続けているという。どのような作品を書かれるのかを伺った。

「自分の好きな歌を書いています。去年からはこのコロナで、皆、本当に平凡な生活がいかに大切なことだったかというのがわかりましたから、江戸時代末期の橘曙覧という歌人の「独楽吟」、「たのしみは」で始まって「・・・とき」で終わる形式でよんだ和歌を書いています」。

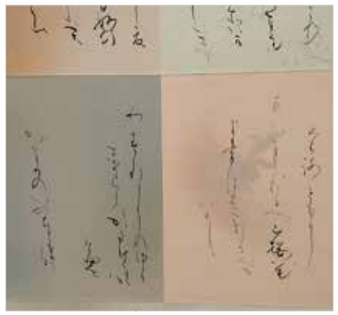
次の日展の作品も「たのしみは」で始まる和歌で作ろうと考えている。「自分の心に響く和歌を二つ選んでいます。初めは並列式で書いたのですが、この頃はちょっと出だしを静かにして途中で大きく動いて最後に少しまとめようという感じで書いています。真ん中より少し後ろでできるだけ大きく暴れるようにと。特に二首目の「しみは」というところで、起承転結の転、序破急の破かわかりませんけれど全体の動きをちょっと変える雰囲気が出せたらと思って、去年からそんなことにチャレンジしているんです」。

宮本先生の頃から研究テーマとして関戸本古今集を中心に倣書を続けてきた近藤さんであるが、黒野先生の最晩年のころに個展をされた。「その頃から西行の小色紙に強く魅せられて、それから随分作品構成も線も変わったと思います。自分の研究古筆は関戸のほか一條摂政集（伝西行筆といわれた二十一回入選の最後の方は関戸と一條を混ぜたものでした）で、大字の横の響き合いや動きの出し方は西行小色紙から学んだものが多いです」。

空間を動かせるかなの魅力

仮名の魅力はどのようなところにあるのだろうか。「かなは本当に空間を動かすことができると思うのです。だから字の形をデフォルメし、バランスを崩しつつ、全体の調和を保つと動きと美しさが出ます。たとえば字の重心をずっと左にとると、左に倒れそうになります。するとそれは左の空間に動くのだと思います。するとそこにすぐ字があるよりも空間が広い方がきれいに見えるということではないかと思います。

「楽しみ」2020年 改組 新 第7回 日展



小倉百人一首屏風

白いところが生き生きしているのが大事なことで、漢字でもそういうことを考えられるのでしょうが、かなはともかく余白を大事にします。

全会話もそうですが、間があることによって識聞いてもらえます。かなでは間が余白で、きわ思っています。また、書道ですので線も全体で一枚にまとめるというのが昔から言を強れるちらし書きです。でも今のちらし書とそは昔よりももっと空間を動かすという意ぶがあり、時代によって表現の仕方もずいん変わってきています」。

一般的な、かな作品の鑑賞ポイントをうがった。「書を書くほうは、間違った字書いたらいけないと思いますが、読まれ方はできたら読まないで、絵のように見いただきたいです。全体でまとまっていることと動きがあること、かなの美しさやなどを味わっていただきたいです」。

現在はコロナの時期で出かけることが減展、教室をまとめたこともあり、毎日筆を展つ時間を多く持てるようになった。それ今さらにいろいろなことが少しずつわかり、今はとても楽しい日々だという近藤さん。今後は日展が終わると書芸院展、日本の書で、自らの玄之会展、中日展、そして読売持と続く。今年の玄之会展では昨年はコロナで出来た時間で百人一首を書き、三分の一は屏風に仕立てた、今年、再来年まで屏風を続ける予定であるという。ふだんはどのくらいの枚数を書かれるのだろうか。

「私はすごく書きます。日展のために毎日一、二枚としても大変な枚数になっていきます。特選をとろうと頑張っていたときは夢中になってたくさん書き一回の日展のため何千枚となったこともあります。それをやって少し筆とかいろいろなことがわかってきました。今は心を込めて毎日一枚を心がけています。そして毎日見比べ、次の日に直したいことや、やってみたいことを決めて、翌日筆を持つようにしています、そして小筆で倣書とちらし書き。毎日筆を持って腕の感覚を磨いているつもりです」。

「ここまで来れたのは小さな会派にもあたたかい目を注いでくださる諸先生がいらっしゃること、そして適切な御助言を時にはくださるお陰で、本当に嬉しいことです。また、こんなに書道で忙しくなり、出歩くことが多いのですが理解し応援してくれる主人がいて、最終段階では作品選びも一緒にしてくれるのはありがたいです。宮本・黒野先生、今の書道界の諸先生、そしてよき理解者の主人に今日あることを感謝しています」。長い年月、様々なことを乗り越えながら、好きな書道とともに歩んでこられた近藤先生の、書を語る生き生きとした表情が印象的だった。

会期中のイベント

＊最新の情報は、公式サイトで告知させていただきます。

日展をより深くお楽しみいただくために、下記のイベントを開催いたします。

講演会・シンポジウム・映像による作品解説

5部門ごとに、日を分けて作家による講演会、
シンポジウムと映像による作品解説を行います。
・場所：国立新美術館3階講堂（入場無料）
・定員：50名　各日講堂前にて30分前から整理券を配布いたします。

10月30日（土）	午後 1:30-3:30	［日本画］	映像による作品解説「自作を語る」　今年度受賞者 映像による作品解説　今年度審査員
11月3日（水・祝）	午後 1:30-3:30	［洋画］	今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会
11月 6日（土）	午後 2:00-4:00	［彫刻］	シンポジウム「今、彫刻を作る意味を考える」 勝野眞言、櫻井真理、野村光雄、前芝武史、坂本健、脇園奈津江 作品解説「彫刻」　上田久利、小野啓亘、上田ふみ
11月13日（土）	午後 1:30-3:30	［工芸美術］	映像による作品解説　今年度審査員 シンポジウム「特選作品を語る」　今年度審査員と特選受賞者
11月20日（土）	午後 1:30-3:30	［書］	シンポジウム「日展の書」　伊藤一翔、石飛博光、牛窪梧十、 横山煌平、綿引滔天 作品解説「書」　遠藤 彊、近藤浩乎、吉澤大淳

＊なお、今後の状況によっては変更が生じる可能性もございますので、最新の情報は公式サイトをご覧ください。

報道関係お問い合わせ

ご取材、写真申し込みなどは下記までお願いいたします。
日展広報事務局　松井
TEL. 03-6312-4098 / 03-5786-4650　FAX. 03-6862-6727
MAIL sr@mbr.nifty.com
〒107-0062 東京都港区南青山2-18-20南青山コンパウンド502

わくわくワークショップ

■5部門のワークショップ

日展作家が直接指導し、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の
5部門を学ぶワークショップです。
小中学生とその保護者が対象で、各回2時間を予定しています。

・実施日程：10月31日（日）、11月7日（日）、11月14日（日）
10:30～（日本画、洋画、書）
14:00～（彫刻、工芸美術）
・対象：小・中学生とその保護者（参加費は無料、保護者は入場券を各自ご用意ください。）
・受付人数：各部門5組（10名程度）
・場所：国立新美術館3階講堂
・申込受付：
ハガキかFAX、又はメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・学年・人数・希望日・希望部門（第2希望まで）を明記のうえ、下記までお申し込みください。申込多数の場合は、抽選とさせていただきます。（受付締め切り10/25必着）

「お申し込み・お問い合せ」
110-0002東京都台東区上野桜木2-4-1日展事務局・わくわくワークショップ係
TEL.03-3823-5701　FAX.03-3823-0453　E-mail event@nitten.or.jp

■いつでも参加できる！「手紙を書こう！」

いつでも参加していただけるイベントとして、会期中に「手紙を書こう！」を実施いたします。日展の作品を見て発見したこと、不思議なこと、聞いてみたいことを「言葉」にして、会場内の専用ポストにご投函ください。

・参加資格：小・中・高校生
・参加方法：
⇒日展会場で作品を見て、好きな作品を選ぶ。
⇒「手紙を書こう！」コーナーで、その作品の作家に手紙を書く。（質問、感想なんでもOK!）
★日展会場の専用ポストに投函すれば、特製缶バッチプレゼント！
※公式サイトでも受け付けます。（缶バッチプレゼントは会場のみ）

作家から
返事が
届きます！

●らくらく鑑賞会●ミニ解説会●「触れる鑑賞」プロジェクトは中止させていただきます。

日展の特徴とみどころ

日展では、切磋琢磨された日本の現代作家の作品、しかも5部門のジャンルの新作が一堂に 3,000 点会します。
エネルギーに満ちた会場で、新たな日本の美術との出会いをお楽しみいただけます。

日展は5部門がそろう、世界でも類をみない総合的な公募展

5 つの部門［日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書］の作家が年に 1 度、日展のために制作した新作が揃う、世界でも類をみない総合的な公募展。

今年 設立114年目の美術団体

明治 40 年から続く今年 114 年目の美術展。日本最大級の公募展で、歴史的にも、東山魁夷、藤島武二、朝倉文夫、板谷波山、青山杉雨など、多くの著名な作家を生み出してきました。

日本最大級の公募展

昨年の応募者数は 11,178 点で、入選者と無鑑査作品、合計 3,018 点の作品を展示しました。

日本の芸術家の渾身の最新作が集結

展示された作品は作家の今を写す鏡ともいえます。作品から世相や背景など多くのことを読み取る楽しさがあります。また、伝統的なスタイルの作品から現代的な作品まで、テーマもジャンルも幅広い作風をご覧いただけます。

文化勲章受章者の中村晋也（彫刻）、大樋年朗（陶芸）、今井政之（陶芸）、奥田小由女（人形）、文化功労者の日比野光鳳（書）、尾崎邑鵬（書）、井茂圭洞（書）をはじめ、前文化庁長官の宮田亮平（金工）などの作品も展示。日本の美術界を代表する作家たちの現在の作品をご覧いただけます。

全国の日展作家がバックアップし、鑑賞を深めるイベントを開催

鑑賞の理解を深めるイベントを開催。第 8 回日展では、各部門ごとの講演会、シンポジウム、作品解説を行うほか、日展作家から学ぶワークショップや作家に手紙を書くワークショップなどを開催いたします。詳細は P56-57 をご覧ください。

日展について　［参考資料］

公募展とは

これまで公募展が発展したのには、日本では作家は公募展に出て世に認められていくことが多く、団体の中で競い合い切嵯琢磨することですぐれた芸術作品を生み出してきたという伝統があります。

日展は

日展は、日本に 400 ほどある公募展団体のなかでも最も大きく、毎年秋に「日本画」「洋画」「彫刻」「工芸美術」「書」の 5 部門が一緒に展覧会を行います。応募者のなかから、入選や特選が選ばれ、無鑑査出品の作品と並んで陳列されます。
応募者は 10 代後半から 100 歳を超える方までさまざまです。会場に並ぶ作品点数は 3,000 を越えます。

1部門につき1人1点応募できる 10月に搬入後、審査

毎年 10 月、指定の期日、場所に作品を搬入し、日展審査員が審査を行い、入選か否かが決定されます。昨年は 11,178 点の応募があり、2,333 点が入選しており、全体では 21 パーセントが入選となりました。科ごとに見ると、日本画が 352 点のうち入選 154 点、洋画 1,663 点のうち入選が 595 点、彫刻 87 点のうち 66 点が入選、工芸美術 645 点のうち 449 点が入選、中でも書は 8,431 点のうち 1,069 点が入選で 13 パーセントと最も狭き門になっています。なお、昨年の新入選点数は全体で 327 点でした。

日展の5つの芸術ジャンル

［**日本画**］　日本の伝統的な絵画で、絹や紙に天然の鉱物を使った「岩絵の具」で描かれます。
［**洋 画**］　キャンバス（布）に油絵の具で描く油彩画のほか、水彩画、版画があります。
［**彫 刻**］　人や動物などの形を石や木を彫ったり（彫像）、粘土を固めたり（塑像）して作ります。
［**工芸美術**］　実用品に美しさや装飾性を加えて作られた作品で、陶磁器、漆、染色、彫金などさまざまな種類があります。
［ **書** ］　漢字、かな、調和体、石などに文字を彫り押印する「篆刻」があります。

日展が輩出した芸術家たち

明治、大正、昭和、平成へと、こうした芸術家たちも日展で活躍し、近代日本美術の発展に寄与してきました。

［**日本画**］　中村岳陵、福田平八郎、杉山寧、東山魁夷、奥田元宋、佐藤太清、髙山辰雄、大山忠作、鈴木竹柏
［**洋画**］　藤島武二、和田英作、白滝幾之助、棟方志功、小山敬三、井手宣通、國領經郎、伊藤清永、森田茂
［**彫刻**］　高村光雲、朝倉文夫、清水多嘉示、北村西望、澤田政廣、圓鍔勝三、富永直樹、橋本堅太郎
［**工芸美術**］　板谷波山、山崎覚太郎、楠部彌弌、帖佐美行、髙橋節郎、青木龍山、蓮田修吾郎、三谷吾一、
［**書**］　日比野五鳳、青山杉雨、金子鷗亭、村上三島、小林斗盦、杉岡華邨、高木聖鶴、小山やす子

日展とは

日展は、その前身である文展（文部省美術展覧会）の創設から今年 114 年目を迎える伝統ある美術団体です。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書と 5 つの部門からなり、世界でも類をみない総合美術展としてほぼ毎年開催され、全国の多くの美術ファンを集めています。その歴史をさかのぼれば、江戸時代の長い鎖国の後、日本は産業の育成と同時に芸術文化のレベルアップの必要性を感じていました。文部大臣の牧野伸顕は、オーストリア公使時代より日本の美術の水準を高めたいという夢を抱いており、1906 年に念願の公設展開催を決め、1907 年に「文展」が開催されました。その後、文展は「帝展」「新文展」「日展」と名称を変えつつ日本の美術界の中核として、114 年の歴史を刻んでいます。当初は日本画、洋画、彫刻の三部門でしたが、1927 年に工芸美術、1948 年に書が加わり総合美術展となりました。1958 年より民間団体として社団法人日展を設立。68 年に改組が行われ、2012 年からは公益社団法人となりました。そして 2013 年 5 月より新体制となり、改組新日展となりました。今年度より、改組新をはずしまして、第8回日展と表記しております。

日展は、毎年 10 月に作品公募を行います。昨年日展の応募点数は 11,178 点で、そのうち入選は 2,333 点、日展会員の作品など 685 点を合わせ、計 3,018 点が展示されました。今年も、約 3,000 点の作品が 3 週間にわたり、六本木の国立新美術館で展示され、その後、京都、名古屋、大阪、安曇野、金沢と 5 会場を巡回する予定です。現代を生きる、日本の最高レベルの作家の新作 3,000 点が一堂に会す日展。熱気あふれる会場から日本の美のいまを体感ください。

114 since 1907

日本博 JAPAN CULTURAL EXPO

報道関係お問い合わせ

ご取材、写真申し込みなどは下記までお願いいたします。
日展広報事務局　松井
TEL. 03-6312-4098 / 03-5786-4650　FAX. 03-6862-6727
MAIL sr@mbr.nifty.com
〒107-0062 東京都港区南青山2-18-20南青山コンパウンド502

展覧会概要

日展は、明治 40 年の第 1 回文展より数えて、今年 114 年を迎えました。今年も 10 月 29 日（金）～11 月 21 日（日）まで、国立新美術館にて第 8 回日展を開催いたします。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の 5 部門にわたり、全国各地から応募された作品の入選者ならびに日展会員、準会員、前年度特選受賞者の作品約 3000 点が一堂に会し、幅広いジャンルの現代の芸術作品をご覧いただけます。東京展の後は、京都、名古屋、大阪、安曇野、金沢の 5 か所を巡回いたします。

展覧会名　第8回 日本美術展覧会
英 文 名　The 8th NITTEN The Japan Fine Arts Exhibition
会　　期　2021年10月29日（金）～11月21日（日）
〔休 館 日〕火曜日
〔観覧時間〕午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）
会　　場　国立新美術館　東京都港区六本木7-22-2
東京メトロ千代田線乃木坂駅直結 都営大江戸線 六本木駅
7出口徒歩約4分　東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口徒歩約5分
主　　催　公益社団法人日展
後　　援　文化庁／東京都
入 場 料

	一般	高・大学生
当日券	1,300円	800円
前売券・団体券（予約制）	1,100円	600円

★お得なチケット★

○**ペアチケット**（前売りコンピューターチケットのみ）
1枚2,000円。お二人で入場の方、またはお一人で会期中2回入場いただく方に、お得なチケットです。他の割引との併用はできません。（販売期間は前売券と同じ）

○**トワイライトチケット**（時間限定入場券・会場窓口販売）
観覧時間：午後4時～午後6時
入場料：一般400円/高・大学生300円

・チケットやイベントなど最新の開催情報は「日展ウェブサイト」https://nitten.or.jp/でご確認下さい。

一　　般
お問合わせ　日展事務局　TEL. 03-3823-5701

巡 回 展（予定）

京　都	令和3年12月18日～令和4年1月15日	京都市京セラ美術館
名古屋	令和4年　1月26日～令和4年2月13日	愛知県美術館ギャラリー
大　阪	令和4年　2月26日～令和4年3月21日	大阪市立美術館
安曇野	令和4年　4月23日～令和4年5月15日	安曇野市豊科近代美術館
金　沢	令和4年　5月21日～令和4年6月12日	石川県立美術館